クラゲと俺とドラゴン先生

真坂　哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クラゲと俺とドラゴン先生

【Ｎコード】
Ｎ３６３２Ｚ

【作者名】
真坂　哲也

【あらすじ】
クラゲと融合してしまったシンは、異世界に来ていた。
ドラゴンにおびえ、大量の奴隷達を従え、いつのまにか王様になりながら冒険する物語りです。
文章を書くのが始めてなので、解りにくい所もあると思いますが、よろしくお願いします。

第1話　ドラゴン先生そりゃないよ

俺は大学の研究の為＜ベニクラゲ＞を採取しに漁船に乗って海に出てた。

ベニクラゲ、別名「不老不死」のクラゲと言われる、ちなみに5mmくらいの大きさ。

ちょっとした肌の若返りの薬でもできれば、大儲け間違いなしだ！なんて思って研究課題としたのだ。

ベニクラゲを大量に採取して、帰ろうと思ったときエンジントラブルで潮に流され遭難してしまう、岸も見えなくなり、かなり沖を漂った挙句嵐に遭って光の渦に飲み込まれてしまったのである。

消え行く意識の中、体の細胞がバラバラになりベニクラゲと融合しながら溶けていった。

そう彼は異次元の世界に、魔法や怪物の住むファンタジーな世界に流れてしまったのだ。

「痛て〜〜」

なんだなんだと考えながら周りを見渡す俺、大きな岩山が見えるが後は天然林みたいだ。

確か海で嵐に……どう見ても森だよな……まぁ生きてるしいいか。

目の前の物に目が留まる。

おっ……

あれ??

俺だよな??

しばらく眺める。

「ひぃぃーー俺が死んでる」

目の前には俺の死体があるよ。

ショックで放心状態……30分くらいたって死んだ俺をそろりそろり調べる。

つんつん、くんくん、ポコポコ!?うむ、変な音だな、これは!!

<<検証結果>>

抜け殻だった……背中の辺りに割れ目があり、中が空っぽだった。

「うぉぉ〜〜、見てはいけない何かを今見てるぞ……たぶん」

セミの抜け殻みたいに……かなり肉とか付いてるけど……あぅ!

まさか、俺ってセミだったのか、それとも蛇だったのか……しばらく考え……まぁいいか、なんとかなるさと笑い。

<<結論>>

クラゲと融合したのは現実だったと決める。

ベニクラゲは老化現象が始まると、細胞が若返る現象がおきるが……正確には不老不死ではない、死んだら終わりだ……ベニクラゲ普通に魚に食われてるし。

ただ老化しないだけだから、たぶん今回は死ななかっただけ運がよかったのだ。

俺の抜け殻を見ればわかる、生身なら全身打撲で死んでるのは間違いない。

体を見ると傷一つない、気がつかなかったがかなり若返ってた。

俺の抜け殻から服を取り着る、服がでかすぎだ……がーん、背が縮んでる、２０歳から１２歳くらいになってる……まぁいいか一人だし。

落ち着いてまわりを見渡すと１００m先の岩山の裾辺りに船を発見、船の中に食料や水などもあるはず。

「うゃっほぃ～」

叫びならダッシュする。

１０mくらい岩山を駆け登り船を調べる、あるある非常食や水は無事だ、とりあえず助かった～と水を飲みながら、これからどうするか考え、<俺の抜け殻>の墓を作ることにする。

船の中から掘れそうな物を持って岩山をさらに登り、眺めの良さ

そうな場所に墓を掘る、
「結構疲れるな……しかしホント不思議だよな～～」
と＜俺の抜け殻＞を遠くから見る。
後は運んで埋めるだ……
「げぇっ、なんだ、ひぃぃ～～～」
食べられてます。
俺の抜け殻……森から虎や狼らしき化け物が出てがつがつと食べています。
ガクガク震えながら岩と岩の陰に身を隠して眺めてると。
ドカーン！
ビックっひぃぃ
ものすごい音が……
背後からドラゴンが現れ＜俺の抜け殻＞を丸のみ。
「さよなら＜俺の抜け殻＞達者でな～～」
声が聞こえたのか？ドラゴンが振り返り、こちらに向かってくる。
やべ～～見つかった。
俺を見つけると目の前で止まり命令された。
「しばらく眠る　その間ドラゴンの巣を守れ」

そう言い放つと岩山にあった大きな穴のに入って行くのだった。

「了解であります」

……無理ですが、戦死の覚悟をします。

なんてことだ、いきなり守れっていわれてもな～～正直生きていけるかもわからない。やばそうな猛獣いたしな、生き残れるのだろうか？。

サバイバルが始まった。

船の中を物色する、２Ｌのペットボトル１０本、非常食約１０日分、簡単な料理道具いろいろある。カセットコンロもあるがガスがすぐ尽きるだろう。操縦席の前には小さな部屋もあり寝泊りできそうだ。

家から背負ってきてたバックパックに着替えやお泊りセットまである。船は小さな漁船だったので三角帆と大きな帆の屋根があり、ロープは沢山ある、屋根は改造して生簀（いけす）に雨水がたまる様にする。

人がいないか3日間探したが誰もいない……兎などの小動物がいるので狩を始める。

岩山の周りで狩をするが……無理。

「早すぎだぜ、絶対取れないな……そうか罠だな」

落とし穴や怪しい罠を大量に作り、棍棒を振り回しながら兎などを追い回す。たまに運良く罠にかかるのだ。

どうもドラゴンの巣の近くには猛獣いないみたいだ。初日に見たがそれ以外痕跡もない。ウサギの皮を剥ぎ取り肉を取り出す。実際にやると結構つらかったが、すぐになれた。

この毛皮で服でも作るか……とりあえず腰巻なるものを作った。

なかなかしっくりくる、気に入った、これは貴重なコレクションとして大切にしよう。服は大きくなったら着ようと大切にしまった。

サバイバル生活は薬草や食べれる木の実やキノコなどいろいろ知識が増えた。

なぜなら毎日怪しい木の実やキノコを食べ、毒にあたり、腹をくだし、痺れるなど、俺自身で人体実験を繰り返したからだ！！ウハハ。

その時俺は気がつかなかったが、あらゆる毒に対しての免疫がついていくのだった。さらに軽い怪我や傷は意識すれば、一瞬で治ることがわかった、きっとクラゲ効果だ。

1月が過ぎる頃には、原始人のような生活になっていた。

「うほっうほっほほほ〜〜い」

軽快に走りながら叫ぶ、このウサギの原始人パンツは実にいい出来だ、と言い聞かせながら、出来ればヒョウみたいな毛皮がほしいが、あんなのに出会ったらまず死ぬね。

棍棒片手に近場の森を探索してると、騎士らしき遺体を見つけた。

おお！！人がいるのか……一人ではないんだ……人に会えるかも知れない。喜びと、今までの変人な行動を見られたのではないかと焦り辺りの気配をさぐる。

「よし、誰もいないな」

周りに誰もいないのを確認し、遺体から武器や防具など装備品を手に入れた。

「お～～これがロングソードか」

と映画で見た、騎士の真似などしながら素振りをする。

「これで戦えるな、戦いたくないけど、ピンチにはなんとかなるはず」

この日から生活が変わった。

原始人を卒業したのだ。

それは人に会えるかもしれない希望。

運がよければ美人な女性なんかに出会えるかもしれない。

この妄想が日に日に巨大化して今では

「俺の名はシン、異界より着たり。ドラゴン先生の巣を守る勇者である」

と「万が一」人に出会った時のセリフを考えたりしてる。

1月前はドラゴンを見て恐怖に怯えていたが、ドラゴンに（先生）を付ける事で親近感をもたし、恐怖を克服したのだった。

さらに美女と同棲する可能性も考え、倒木を切り家作りや、柵を作る作業に没頭した。

夢のマイホームが出来そうな頃、まー倒木を蔓で結んで作った原始的な家だ、小屋のほうが正しいのか。

「まーこの作業も後数日で終わるな、次はベットだな」

と休憩をしてると背後で「がさがさ」と音がした。

ビック！？

なれた手つきで剣を構え辺りを探る。

「俺の名は……！？」

なんだ犬か……小さな犬であるが、かわいくない

「やるのか、おぉ」

敵を威嚇し俺の縄張りを主張する。

襲ってくるのか、武器を構えてしばらく様子を見るがそうでもない。

ふっ脅かしやがって……と犬など無視して作業をすすめる。

夕方近くまた「がさがさ」と音がする。

ビック……

剣を構えて待ち受ける。

また犬が現れ今度は、子豚みたいな獲物をくわえてのんきに歩いてる。

なんだあれは、うり坊か！？この周りで見たことがない。

実にうまそうだ、やるしかない。

俺は容赦なく犬に襲いかかりうり坊を略奪する。

「うめ～～～この肉最高だわ」

と大満足しながら食べてると、物ほしそうな顔の犬が近くで見てる。

ふと略奪を思い出し、すまなそうに肉を半分投げると、がつがつ食べていた。

「気に入った、よしお前を弟子にしてやろう」

と決めクロと名付けた、真っ黒な犬もどきだからだ。

同じような感じで　猫もどきも現れそいつはシロと名付けた。シロとクロはたまに小物をくわえて現れる。それを奪って料理し半分を返す、罠で取れた獣がいる時は分けてやったりした。

いつのまにかクロとシロが家に住み着き3人暮らしになっていた。

なんて偉いやつらだ、もう狩などしなくてすむかもなと喜び料理するのだった。

ある日クロとシロをよく見たら、狼と虎系の魔獣だとわかった。

きっと＜俺の抜け殻＞を食べた、あの猛獣達の子共だろう……考えたら恐ろしかったが、仲間なら心強いと思い、かわいがる事にした、かわいくないけどね。

「愛があれば、言葉なんていらないさ」

なんて考えながら剣の素振りをしていると、クロがからかう様にやってくる。

めちゃめちゃ馬鹿にされてる感じだ、俺様にも我慢の限界があるぞ。

「よかろう、稽古をつけてやる。師が弟子を思うのも愛だぁぁ」

と言い放ち棒切れをもって、襲い掛かる。

「いざ　勝負」

めちゃめちゃ素早い、棒切れは空をきるばかりだった。

この日から毎日の稽古は剣から木刀に変わり、クロやシロと訓練するようになった。

人に会うことも一度も戦う事もなく、半年が過ぎた。

「クロ勝負じゃ」

叫びながら相手を探る、朝の稽古だ。

いきなり背後でドーンと音がする。

まさか……いやな予感がする落ち着いて振り返る。

ドラゴンの巣から、かなり小さくなったドラゴン先生が出てきたのだった。

「おい小僧、我が名はサンダードラゴン、今より契約を結ぶぞ……我が名を呼び　契約すると言え」

いきなり命令される。

「はい先生、ドラゴン先生と契約します、お願いします」

と返事をして怯えまくる、奴隷人生のはじまりか……終わった。

「よし契約はなった、では森のほうに行き我を召還してみよ　我が名を強く念じ呼び寄せるのだ」

「わかりました」

と叫びダッシュで森の奥に駆け込む、ミスったら確実に殺(やられ)される。

ドラゴン先生ここにきてくださいと強く念じ叫ぶ

「ドラゴン先生　来い！！」

ドガーーン　バチバチバチ（電気の音）

ドラゴン先生の回りの森が広範囲に吹っ飛び　稲妻が渦巻いている　大きさも初日見たよりでかい

「やっと　力を獲た……　感謝するぞ小僧」

ドラゴン先生の話では、お前の抜け殻は高濃度の魔力の結晶であり、食べれば1ランク上の力が得られたが、なぜか細胞が若返りだした。

細胞の活性化が止まらすどんどん若返っていく、１０００年以上生きていたドラゴン先生は役半年ほど若返りの時間が必要だったらしい。

若返りの原因がお前の魔力を見てわかったらしく、契約すれば若返りが止まり最高の状態の体になる事も予想できた。

簡単に話せば、６０歳の人が若返り過ぎて５～６歳子共になり、そのまま年を取らなくなってしまう。

原因の者と契約すれば若返りが能力のピークの時（２０歳くらい）に安定するのだった。いつのまにか、俺の体も１８歳くらいに戻っていた。

普通なら召還者はかなり高い能力を必要とするが俺の抜け殻を食べたので、その力がドラゴン先生に宿り、俺と共鳴してるらしい。

ドラゴン先生と契約はしたが、もちろん命令されるのは俺だ……しかも召還するのに、でかすぎて屋外でないと無理らしく、召還時サンダーブレスなる物を発動するので、もし人や建物があれば吹き飛んでしまうだろう。

くだらない事でドラゴン先生を召還したら、激しく怒られ恐ろしくて召還できない事もわかった。

先生　結局……使えないじゃ……

第1話　ドラゴン先生そりゃないよ（後書き）

よろしくお願いします

第2話　隠れ家

ドラゴン先生の話ではシロとクロも俺の抜け殻を食べているらしく契約できるとの事だ。

俺は、我が弟子なら思う存分命令できると思い早速契約をした。

「クロ、シロ。召還」

クロは真っ黒い陽炎のような狼に、シロは真っ白い白虎になった。

「ほー、影狼に白虎か」

ドラゴン先生の話では、種族最強に近いらしく、普通召還出来る物ではなく、人になつく事もない。危険な魔物の名に入るらしい。

クロは見た目からやばそうだが、シロは見た目は堂々とした白虎だイメージ通りだ。

恐ろしいが、とりあえずシロから馴れていこうとシロの頭を撫でながら。

「クロ　シロよろしくな」

と笑顔で挨拶。

「がお〜〜〜ぅ」

シロが胸を張るように咆える。咆哮です……痺れて動けません。

（咆哮とは咆えて相手を威圧し麻痺させるスキルです）

謀反だ、明らかにわざとだろ油断したぜ。

正直、怖すぎて馴れるまで（咆哮とかも合わせて）にかなり時間がかかった。

次は騎乗の練習だ、馬に乗ったこともないのでひたすら練習だ。

最初はゆっくり歩いてもらいなんとか乗れる程度だったが、今では結構乗りこなせるようになった。

クロとシロを引きつれ森を探索するが魔物などさっぱりいない平和な森だ。

騎士の死体があった場所を重点に探す人に会えるかも知れないからだ。

シロの背中に乗り森を走ってるとクロが突然走り出す。

「きゃーーー」

遠くで女性の悲鳴が聞こえた。

ついに出会いキターとダッシュで現場に向かう。

クロの前に化け物がいる。人型だがまさに狼だ、これが人獣なのか？

おびえてる様だが何かを叫んでる。仲間を読んでるのか……？

「女性をを何処にやった！」

周りを探るが他に誰もいない……血痕もないから連れ去られたか！？

剣を構えて人獣を威嚇する、人獣は私の剣を見たとたん力なく座って何かを言ってるが、さっぱりわからない……シロほえろ！

「がおぉぉぉ」

突然の咆哮で気を失う人獣、船にあったロープを取り出しグルグル巻きにして逃げない様にし、周りを探索するが足取りがわからない、ドラゴン先生のところへ連れて行くしかないか……先生なら言葉がわかるかも知れない。クロが人獣を咥え、先生の所に戻る。

「ドラゴン先生〜〜　大変だぁぁぁ〜〜」

とあわてて走り込む……ハァハァ

「女性がさらわれた、早く助けなければ……」

早口に状況を話す……大切な出会いなんだと真剣に。

めんどくさそうに振り返るドラゴン先生。

「言葉か、忘れておったのう……ま〜〜あわてるでない。その女を起こせ」

女って……周りを見ながら人獣の事だとわかる、焦る俺……まさか勘違いか！？

ドラゴン先生が呪文を唱えてる、通訳の呪文らしい。

人獣を起こすと、ドラゴンを見て泣き叫けぶ。

「食べないでください。何でもしますから命だけは……」

「これで良かろう、シン後は人狼と外で話せ」

言葉を理解した俺を確認し、弱みを握った様にニヤリと笑う。

外に連れ出し人狼と話す。

「お前な～～人狼ってのは、もっと、かわいらしくだな、耳がピコってついて、もっと愛着が沸くものなんだよ。胸もでかくてだな。スタイルもよく、ぶつぶつぶつ……あぁぁぁなんて事だ」

勝手に理想を話落ち込む俺……ああ君が悪いわけでないよ、判ってるこの世界に少し絶望したのだよ。

「もう家に帰っていいよ、君は自由だ！！」

かなり凹でる様で顔も見てない、そんな俺に切羽詰った用に話かけてくる。

「あの仲間が死にそうなんです、お願いします。助けてください」

「どんな化け物に捕まったのだ？」

やる気ねーオーラがでまくりだ。

「化け物ではなく、病気なんです」

「はい！？何人くらいだ」

「２０人ほど、急がなければ死んでしまいます。何でもしますので」

「分かった、助けよう。しかし君の命は今日から私がもらおういいか？、君の名前は」

「わかりました、私の名前はサラです」

見た感じ彼女はかなり強そうだ俺にはわかる、よく見ればワイルドな顔が怖すぎるぜ。恩を売れる時に売っとけ、この森で生き抜く為には護衛（なかま）がいなくてはな、最高の右腕になってくれるだろう。

「俺はシンだ、一つ聞くが俺が行ったら間違えて食べられる、なんてないよな？」

「大丈夫です、動ける人はほとんどいませんし皆、女性です。ちゃんとピコって耳がついてる人もいますよ」

「なんだって～～、ゲフン、そうか、そうなんだ。サラは、戦闘系なのか？」

やっぱいるんだ、出会いだ出会い、よかったぜ。

「私はまだ生まれて若いのでランクが低いのです、上がればピコって耳になりますよ、戦闘は弱いですが……戦闘系ってなんですか？」

サラにピコ言われてもまったく創造できないのだが。

「なんだって！！戦闘できないのか……まぁいい。ピコには何年かかるのだ？」

「周りの話しでは早くて１０年とか平均３０年かな？」

聞いた俺が馬鹿だった、その頃は死んでるさ。コックとして生きてもらうか、飯しだいか不器用そうだがまぁ後で考えよう。

「ドラゴン先生に話してくる、そこの家に薬草があるので準備してくれ」

俺はドラゴン先生に助けに行くと話すと、この奥に水が沸いてるから、その水と＜先生の抜け殻＞があるのでその肉を持っていけと……先生も脱皮したんですね……共鳴（シンクロ）したってこれですね。俺も化け物になったと思ったよ、分かる分かるよ。しかも＜抜け殻＞、邪魔なのでくれるらしい。

ドラゴン先生の寝床から少し奥に行くとかなり広い空間があり冷える、冷蔵庫の中にいるようだ。
この部屋は半人口的で天井や壁の上部の隙間から光が入っている。広間の奥に大きな岩がありそこから水が湧き流れ出している、岩を伝い流れた水は水路にあつまり大小の水溜りを作り壁の奥に流れて行く様だった。

この広間に先生の抜け殻もある……生きてるようで恐ろしいが剣で内側から肉を少しそぎ取り、不思議な水もペットボトルに入れる、たぶん何かの効果があるのだろ見た感じから怪しい、回復だろうな。２Ｌのペットボトル２本と肉３キロくらいをマストの帆だった布にくるみバックパックに詰め込む。

クロにサラを乗せ俺はシロにのる。

大体の場所を聞いて出発する、東側の岩山に沿って森の中を2時間近く走ると、見上げるばかりの断崖絶壁がある、そこらしい。近くまできても何処にあるか分からなかったが、サラが指差す場所に小さな洞穴がある。

「あれが隠れ家です」

入り口の近くに来ても人の気配がない、武器を手に警戒しながら中に入り周りを見渡す……絶句。

全員死にかけてます・・・獣人？やら見たことない人種？がいた。バックパックからペットボトルを取り出し、重症な人から少しづつ水を飲ませる。かなり楽になるのかうめき声などはなくなった、表情も落ち着いてきている。

よく見たらサラも苦しそうだ、水を飲まして。

「お前も寝ていろ」

薬草を探しにいく、胃腸薬系だ。思ったより重症だ、病人にいきなり強い薬は逆効果と昔本で読んだことがあるからだ。適当に薬草を取り戻り台所らしきところでドラゴンの肉をミンチにしてさらにつぶす。

これなら飲めるだろう……残ってた水との2Lの水に薬草を入れ、肉を小さじ半分くらい口に入れ水を飲ます。

全員の食事が終わる頃には暗くなっていた。顔色も良くなってるみたいだから安心して、あまった水と肉を置き。シロに洞窟を守っ

てもらうことにしてドラゴンの巣に戻ることにした。

クロに乗って戻る、帰りは飛ばして1時間で着いた、今日の事を先生に話す。

「うむ上出来じゃ、あの人獣を見れば病だとはわかったが、そこまで酷かったのか、死臭もしてたしのう」

先生の話だと、普通ドラゴンの肉は鮮度が落ちない、栄養満点のめちゃうまい肉だが、この抜け殻の肉は特別らしい。先生が調べて分かったのは、俺の抜け殻効果によく似てる。高濃度の魔力、能力UP、若返りや寿命効果、怪我や万病にも効果絶大。

先生も気が付かなかったもう一つ特別な効果がある。

それは、惚れ薬だ。

5～6種類の薬草と混ぜ合わせると回復効果が上がるらしいので明日取って行くことにして準備する。

持っていくを取り水を10L用意、ついでに俺たちの食事もドラゴンの肉と決めたので肉15kgくらいにした、シロとクロが大量に食べるから。

明け方から森に出て薬草を取り昼前には隠れ家についた。中から話し声が聞こえる。

「失礼しまーす」

中に入って超びっくる、座って話ししてるし中には歩いてる人も。

「「「あっ　シン様　ありがとうございます」」」

全員感謝や尊敬の眼差しで深々と頭を下げる。

「ああ良かった、大分元気になりましたね。昼飯の材料持ってきたから皆で食べよう」

すごい回復に思わず胸をなでおろす。

少し照れながら逃げるように台所に向かう、感謝されるのに慣れてなくはずかしいのだ。

台所に行くと絶句……

めちゃめちゃ美人な女性が出てきた……

「あ、シン様おはようございます」

「お、おはようございます」

ペコリと頭を下げる俺

「あ、緊張しなくていいですよ、サラです」

「えええ〜〜〜〜〜」

サラの話では、夜、体に変化があり能力がかなり上昇しランクアップしたらしい。めちゃかわいい……シルバーの髪に白い肌，三角の耳が頭のピコって付いてる、いや～～もう、縛ったりしてすいませんでした、神様に謝る。

サラに昨日の話を聞くと、昨夜遅くには容体がよくなったので、もう一度全員に軽く夜食を与え朝症状の重い人を優先に食べれるだけ与え残りを皆で当分で分けて食べたらしい。

バックパックから水を取り出し、泥棒袋の様にかついでた布袋からドラゴンの肉を取り出し適当な大きさに切り薬草をすり込む。ミンチにしようと思ってたがすっかり食欲も回復してるみたいだから、飲み込みやすい大きさに切ることにした。味見したらめちゃ美味いシロとクロにもお裾わけして、あまったら山分けだぞっと約束する。

「よしゃ～飯できた　腹一杯食べてくれ」

皆の所へ持っていく……食べる食べる、あの病人だったよね？１５ｋｇが見事になくなりました。

人獣達すげー！！

「シン様、お話があります」

サラは意を決した様な顔で話しかけてきた。

サラの話では１年前、帝国がドラゴン討伐の為　大規模な兵をだしてこの森に進軍した。

結果は散々たる敗北で軍は尻尾を巻いて逃げたらしい。ドラゴン

討伐の為、多くの奴隷が借り出され、その中にサラ達もいたのだ。男達は前線に借り出され、戦えない女や老人などは食料や資材を運ぶ役目に回された。

サラ達が前線のキャンプに着いた時ドラゴンの襲撃に出会い、勇敢に戦った者は全滅し貴族や将軍達は皆我先に逃げ出してしまった。残された奴隷たちは何とか助け合い戦場を逃れそれぞれの故郷や主人の元に帰っていき、帰りたくない者や怪我をして動けない者だけが残ったらしい……。

そして、今の隠れ家を見つけ、ドラゴンから隠れる様に暮らしていたが、数日前から原因不明の病にかかりあっと言う間に全員感染してしまったのだ。今回シン様に助けられ皆覚悟を決めたらしい、脱走兵として国に突き出せばそれなりの褒美が出るし、ドラゴンの生贄として出してもかまわないと。

そんな事しないから、大丈夫ですと話すが信じてくれない……結局こちらの身の上話もした。難しい所は記憶喪失って事で、ドラゴンの巣を守っている事や帝国の人間ではない事。

「では　その剣は？」

拾った……この剣が帝国の騎士の紋章があり帝国の人間だと思われたみたいだ。それならシン様の奴隷になると言って皆さん聞かない。サラはいい、その他はだめだ！！

「ドラゴン先生に聞いて許しが出たらいいよ」

と話その場は去った、先生も嫌がるはずだ間違いない！！

家に帰って、早速先生に聞くと

「お前の奴隷だろ、好きにしろと」
ってマジですか！？

困った、俺は見たのだ。たしかにピコってついてた、しかしもう、おばあちゃん、いや老婆だ。考えて見てくれ、ガリガリに痩せて病気の老婆が生の肉にくらいつく姿を……背中に冷たい汗が流れる。

エロレベルで話すと、俺の最大でも熟女までた。これでもかなり厳しいのだが、あれは完熟を通り越して干しブトウ？いや干婆だな……しつけの厳しいご老人達が、俺とサラの愛の生活に邪魔をするはずだ。

黙って見てるはずがない……こんなジャングルで礼儀やしつけなんて真っ平だ。

鼻がよく効くやつらの前で臭い屁を出すのは聞きそうだな。まずはこれで行くか。

断る言い訳を１００個ほど考え俺は寝た。

第2話　隠れ家（後書き）

よろしくお願いします

第3話　引越し

朝起きて気が重いが獣人達の隠れ家に向かう。

住民は人狼とドワーフがほとんどで、後シャドウってのが1人いた。

人狼は、老人でも人間の何倍も力があるので、荷物運びとして連れてこられたみたいだ。

ドワーフの人達は主に武器や防具の修理、薬草の採取やコックをさせられていたらしい。

シャドウは隠密部隊なのか分からないが誰もよく分かってなかった。ただ怪我がひどく動けない状態だった所を助けられたらしい、今もほとんど動けない。見た目は髪が黒く肌も黒い目と口だけが赤かった。

妖艶だが危険な香りがする、怪しすぎです、ステラさん。

「どうやって断ろうか……」

洞窟の風上で……ぷぅ～っと少し屁を出しその毒ガスを素早くつかみ鼻でコブシを開く、にぎり屁だ。うぉ、臭い……マジくせ～～、今日のは過去最強クラスだ、威力抜群だ。風上だから人狼達はすぐ気がつくだろう。

音もしない……あれだ特攻するしかないな、武田信玄の風林火山で行こう。

風の様に入って、林の様に毒ガスをまく、奥地につた頃には、火の様にガスが鼻を襲う。敵意の視線が俺に向かうが山の様に受け止め、君達は自由だ俺は俺の道を行くと不適に笑い残りのガスを出しながらさって行く。

最後にサラお前は別だと抱き寄せ消える。やってやるぜ！！

風のように素早く隠れ家（てきじん）に入る……てくてく

「おはよう」

「「「おはようございます」」」

うむ、やはり気が付いていたか、俺は挨拶しながらスカシ屁を垂れ流す……食らえ毒ガスを……ウハハハ

……反応少ないな……グエなんだこれは

＜＜数分後の診断結果＞＞

はっきり言ってこの狭く薄暗い隠れ家は汚なすぎた、自然の洞穴に手をくわえただけなので、ゴミや食事の食べカスが見えない場所に溜まり悪臭をはなってるし、隠れて生活してたから皆汚いこれじゃー病気にもなるよ……ここに住むなら１０ｃｍは綺麗な土を入れ換気扇とかつけたいくらいだ。昨日はマジあせったからそこまで気が付かなかったが、酷かった。

入り口近くにいた人狼が話し出す。

「流石です、ご主人様。もうこの辺りの縄張りに臭いを付けてきた

のですか！」

なんだって～～！！お前ら犬……そうかありそうだ……ミスった。チラリと周りを見ると老婆達はくんくんして、流石だ……とか。この臭いなら、大なら数日は持つ縄張りも半端い広さだろとか、小物など立ち寄る事もしないだろう。いろいろ、ヒソヒソ話し尊敬の眼差しで見る。やばい、作戦変更だ。

出鼻を挫かれたぜ、作戦の９割が台無しだ。脳ミソで＜＜緊急事態発生＞＞ってサイレンがガンガン響く、最終手段をするしかない。発狂して、奴隷はムチでシバクふりをするしかない。俺はカバンから昨夜作った、怪しいムチを取り出し、不適に笑う。＜注、そんな趣味は無いです＞。

狂人と思わせるしかない。腹に覚悟を決め、雄たけびをあげる

「うぉぉぉ～～～」

地味に雄叫びは気持ち良かった。腹の底から叫んだ事は今まで無かった。実に爽快だ……

「おらぁおらぁ、うひゃ～ほぃ」

バチバチ地面を叩きながら威嚇する、顔を歪め慌てて逃げ出す老婆、ひぃ～と避けようとする老婆の動きはまさに妖怪、さっきまで動けなさそうだったのになんて素早い動きだ、火事場のクソ力か？ミッション成功……すべての人をたたき出す。む……一人いるステラだ。見るからに汚れてる。

俺はステラに向かった。シャドウがどんな生き物か知らないから、

この際観察しようと決めた、動けないのか、俺は人形の様なステラの服を脱がす、酷い傷が何箇所も見える。包帯を取ってみると傷が少し化膿してそうだ、ロボットの修理の様にマッパにしながら観察する、いや服から危険な武器が服から続々でてくる。動けないからいいが動けたら、俺は即死だとわかった。

皮膚の中も武器が無いか警戒しながら、全身を指でつんつんする、安全確認だ。危険が無いと知ってとりあえずドラゴン先生の肉と薬草で作った薬を傷口にぬる。異常なし、どうも腱が切れてるぽい、あと酷い火傷だ。外傷は傷が少し化膿してるくたいだ。

ステラも安心したらしい、緊張が緩んでる。酷い傷には、綺麗な布を巻いて、見た目は傷が見えない様に巻き、今だと思い、カバンから俺とオソロのウサギ皮セット、女性用上下ビキニ、を取り出し体に付ける。通気性、心地よさ完璧の物だ。美しい。脱がした服は洗って武器を取り好みの改造をして渡そう。

しばらくゆっくり眺めて、腹減ってるか？と聞く、静かにうなずく。言葉は分かるらしい、ふとバンパイア系かもと警戒して口を開かせる、歯に牙は無いようだが、なにかある、しかし口が少ししか平かない……顔の全体を両手でなでなでしてると＜注、顔も火傷で酷い＞手になにか引っかかる。よく見ると左右の耳の下近くに小さなトゲが刺さってる。

ゆっくりそれを左右抜き取る、なんだこれは小さな釘みたいだ、サラは口を大きく空ける動作をしてる。

まさか、サラの口を見るなんか刺さってる、「指をかまないでね」と祈りながら、指を突っ込みずべて取り除く……痛かっただろう。

黙ってうなずくステラ、ドラゴンの肉を満足いくまで食べさせる、こいつは老婆達の魔よけになる、しばらく面倒見るか……腹は決まった。

俺は覚悟を決めた、サラとステラ一緒に住む、老婆たちは老婆の村を作ってもらえばいいのだ。サラを探しながら住民に話す。

「先生も俺の部下ならいいいって」

老婆達は喜んだ。まず動けないって思った体が、シン様の雄叫びで甦ったと。失敗だった老婆に雄叫びは狼の号令、群をまとめる声と、勘違いし動けるのになぜ動かないのかと怒られたと思ってる。

本能が働き動く自分達に驚き、俺よりも素早い移動で荷物を整理して出発の準備をしだす、シン様は不安だったステラを裸にして武器を取り上げ、口の中の暗鬼までチェックして私たちの安全を確保した。

なんか目がやばいキラキラ輝いて、ハッキリ話す俺はサラにぞっこんだ。なんか人獣って一夫多妻なのか……なんか全然気にしてないぞ！！

ほとんどの人がすでに元気になっているので出発することにした。

クロの背中に俺とステラが乗り、俺がステラを抱きしめながら、シロには重そうな荷物を運んでもらった。ステラは眠っている……起きてても話さないし動かない。寝息でなんとなく分かった。

「サラ、この辺りは魔物はでないのか？」

「ええ、ドラゴンの巣の周りはめったに魔物は出ませんよ」

「巣の周りってかなり離れてるけど……どのくらいまで??」

「ここは歩いて半日ですが　そうね3日くらいの距離ならほとんど出ないですよ、ドラゴンの巣の近くには魔物は近づかないのよ、だから私達もここに隠れてたんだよ」

「そっか〜〜それで出会わなかったのか」

「ドラゴンの巣の周りで暮らせるのは安全を保障されたようなものなの、シン様は巣を守ってるって話すけど守られていたのかもよ」

って笑う、やっぱりかわいいよサラは、美を感じた。

「そうなのか〜〜」

うなずく、他にもいろいろあり　最初はそれでもたまに魔物を見たが、戦で怒ったドラゴンが近くの魔物を狩だし逃げ出したらしい……それに最近はこの辺りの魔獣が統率されたようになり巣に近づく魔物を食べてるとか……

実はこれは　もともと魔獣の巨狼などのボスであったクロやシロ（こっちは巨虎）が縄張りを守らせていた、しかもクロやシロの抜け殻を食べてめちゃめちゃ強くなっていた。

逆にサラとかはかなり危険があったが、シンの人に会いたいって思いを知ってか危険を感じない限り襲わないようになってた。

獣人の中にはシロやクロと会話できる人もいるらしくこんな話を後日聞くことになる。

夕方前には家に着き、夢のマイホームに（実は小さな小屋2部屋あるが1つは倉庫になってる）ステラを寝かせたほとんど動けないので……

悪い菌がついてたらいけないと思い、あの不思議な水で皆さん綺麗に体を洗ってもらうことにした。ドラゴン先生に聞くと不思議な水は枯れる事はないから好きに使っていいと。しかしドラゴンの巣に入って良いのは俺だけと言われた。他の人が来るのはうるさいのでけして入れてはいけないと……

船にあったバケツ大小など（5個ある）を持って次々と外に水を運ぶ……重労働だ……見かねて先生は今回はサラだけ入っていいことになった、前も一度入ってるし。

体を洗うってのも風呂などないので布で体を拭くのだ。ドラゴンの巣を汚してもいけないので最初にサラの体を洗うことにした。

スケベ心丸出しで

「サラ背中をふいてあげるよ」

といいながらタオルをしぼる、ポッと赤くなりながら、うなずくサラ、素敵だ。

「シン様、お願いします」

恥ずかしそうに背中を向け服を脱ぐサラ、背中には鞭で打たれた古傷が痛々しく残ってる、背中をやさしく擦ると……あれ??何か変。

ペロって皮がむける、日焼けして皮がむける感じだ少し厚めだ。

「痛くない？」

「大丈夫ですよ」

不思議そうに皮をむいていく、おおお、下から出てくる皮膚は真っ白でしかも鞭などで叩かれた昔の傷後が無くなってる。

「サラ傷が治ってるよ」

わかってない……

「だから背中の古傷がなくなってるんだ」

ペロリと皮を見せる……顔を真っ赤にしながら手で覆う、背中の傷より皮が気になったみたいだ。丁寧に背中を洗いタオルを渡す。

「俺新しい水汲んでくるから、ゆっくり洗って」

嫌われたかな、ここは紳士にしよう。

サラを見ないように汚れた水を捨てに行く。新しい水を汲んでは皆の所に持っていき、汚れた水を捨て汲みに行く、歓声が湧いている。

一段落ついて皆を見れば……

ピチピチの女性が……ありえん。

元、老婆達が調子に乗って。

「うふ～ん　あはぁ～ん」

てお色気ポーズしてる、絶対だまされんぞ。

しかし凄い見た目１００歳くらいが２０歳くらいに若返ってる。

ドワーフの人達は若返っても、色気など。

絶句……

神様、幼女がいます大量に……

良く見るとめちゃ好みの女性とまったく興味ない人がいる半々くらいだ。どこも悪くないし整ってるんだが……あれだ、スバリ美しくない、好みの問題なのかな？まぁ、サラがいればいいのだよ俺は。

ドワーフ美人って言うのかな？人獣もそうだけど……美しくないのに同族から絶賛されてる不思議だ。
妖怪と呼ぶしかないなあれは……とりわけ美人とされるのは「ブー長」と心で呼ぼう１番不細工だ。

しかしあれだ＜抜け殻の肉＞やばいな、俺は味見くらいしか食べずに良かったと思った……これ以上若返ってたら。

俺や先生は抜け殻だったけど彼女たちは、皮がむけたのか……軽い脱皮だな彼女達も仲間入りなのか。うむ、納得いかねー、まぁいっか前より１００倍ましだ。

そんなことを考えてたらシロとクロが獣を咥えて返ってきた、丸々太った豚もどきだ。皆、大喜びで夕食の準備が始まり宴になった。

食事の準備をしている時俺は小屋に戻り、ステラの体を拭くことにした。酷い傷が治るのではないか確かめるのと、今まで一緒に生活してたとしてもお荷物であったのは間違いない、しかも仲間の種族はいないのだ。

心の傷もかなり深いはずだ、同じ隠れ家にいれば気を使って世話や話もするだろうが今彼女らの部屋は大地で屋根が空なのだ、これからは辛くなるかもしれない、俺の家に来たのだ俺が面倒を診よう。

昔を思い出す、キャンプに行くと開放感がある、あれはいつも四角い部屋で過ごしベットで寝る生活が、キャンプではテントが部屋でなくベットだったなぁ〜〜。

ステラに挨拶をして体を洗うぞと話す。

「いや……恥ずかしい」

「そんな年でもないたろ……昼も見たし」

ぶつぶついいながらやさしく服を脱がす。

痛々しい火傷が見える……

治る様に祈りながら、やさしく体を洗う。

ペロリと皮膚がむける、かなり良くなってるがまだ火傷の後は酷い……皮膚が萎縮してるのだリハビリが必要だ。

「皮がはげてるけど痛くないかい？」

「はい」

ゆっくり丁寧に洗いながら話しかける。

ステラはびっくりしながら見ている。

「シン様は回復魔法をつかっているのか？」

「魔法？いや」

ドラゴン先生の肉の効果と話す。

「しかし今やってるのは回復魔法だ、見たこともない方法だが……上級者でもこれはできまい、しかも詠唱もしないでなさるとは」

ええええ？？

「魔法とか知らないのですが……どんなものですか？」

「なんと……」

しばらく黙ってたが話し出す。

「記憶喪失でしたね……きっとどこかの国の名のある人でございますよ……魔法はですね」

一呼吸おいて話し出す。ステラが知る最上級の魔法理論、使う人はいなくおそらくそうであろう魔法の最先端技術だ。こっちでは重力を説明するのに似てる、知ってるが上手く説明しにくい。

「簡単に説明しますと、心でイメージし魔力を込めて再現する、呪

文とか詠唱はイメージを強化し威力や発動率を上げるものです」

「はぁ〜〜」

さっぱり解らない。

「回復魔法は普通、自己回復のスピードを上げるのです、上級者は他人に自分の魔力や生命力を注ぎ回復をはやめる……魔力などを注ぎ込むイメージを持つのです。シン様が今使ってたのは、シン様のイメージで私の体を修復させる。細胞一つ一つに命令してる感じです。大げさに言えば手を無くした人の細胞に手を作れと命令し再現させようとしている」

「そうなんですか」

良く解ってない……しかし直るイメージがあった、サラの皮を剥いだ後を見たときから、もしかしたらと。

綺麗な元の状態をイメージしながら体を拭いた、魔法なのか？？肉のおかげと思うのだが。どちらでもかまわない回復してくれればうれしいのだから。ステラの体を丁寧に洗い、ドラゴンの肉と不思議な水の食事をして小屋の外に連れ出す。

「シン様〜〜ご飯ができましたよ〜〜」

声が聞こえるステラを小屋のそばの椅子に座らして

「飯たべてくる」

と断り晩飯を食べに走る。

皆の浮かれたバカ話を聞きながらステラは静かに笑った。

シンの暖かい魔力で包まれたステラは思った、あの暴れまわってたドラゴンがおとなしくなってるのもシンの力だ、もう死にたいなんて思ったらいけないな。なんとしても回復しなければ、セリアは体で解ってた、今までにない生命力にあふれてる、そして回復してるのだ希望を持ち、暖かいシンに感謝した。

夜結局、俺とステラで寝る事となった。俺の家にはベットが1つしかないので、サラとは明日以降だな。

明日は隣の部屋を掃除してベットをもう1つ作って。ステラの部屋にするか……明日は忙しくなるな。そうだ、ウサギの皮でもう1セット、サラ専用のスペシャル水着セットを作ろう。ごそごそと作業開始する。

「シン様何をなさってるの？」

ステラが聞いてくる、楽しそうに何かを作ってるので気になったらしい。

「ああ～～これ、ウシシ。男のロマンだよ、ステラその服になんか改良点ある？」

よく見るとウサギの皮だ、あきれて話す気も起こらず寝たふりをする、ステラ。

大体型を作ったので寝ることにする、もちろんステラに手は出さない。疲れてたから熟睡だった。

第3話　引越し（後書き）

よろしくお願いします。

第４話　村作り

大変だ～～～～～

とんでもないことが起きた。サラが１０歳くらいに若返ってた。

最初は分からなかった、あれ変な子供がいる。

「お嬢ちゃん、どこから来たんだい？」

「シン様、サラですよ、またランクアップしました、うれしいです」

うれしそうに騒ぐサラ確かに前よりも美しくなったが、だめなのだよ、それでは、放心状態の俺……終わった、あと5年、がんばっても3年はかかるだろう。

俺はロリではないのだよサラ、俺の愛から逃れて喜んでるのだね。

サラよ、すまないが心の旅に出るよ、どうしたのお兄ちゃん……男にはロマンを求める熱い心があるのだよ……妄想の世界に入る俺。ああなんて青い空なんだ。

俺の世界をぶち壊す妖怪軍団がやってきた。

「シン様ぁん～～　ご飯よ」

おのれ妖怪軍団め！貴様らの呪いかこれは……明らかに声が怪しいぞ、その手には乗らん。

ひそひそ話が聞こえる。

「きっと恥ずかしいのよ」

「初心だね、照れてるのよ」

「もうすぐ我慢できなくなるわ」

キャーキャー言って朝から騒いでる……やつらから俺の童帝（サンクチュアリ）を守るってみせるぞ。

そんなころで人獣達の家を作ることになった。

家を作るのに大変なのは木の乾燥である、生の木は重くてもてないのだ。しかしドラゴン召還で大量の倒木が出来ていた。後まぁ、俺は皮むき間伐ってのを大量にやってたから、皮むき間伐とは杉や桧の皮を木を切らずにそのままべリべリと剥はいでしまう。すると立木のまま木は枯れ一年もすると木が乾燥した状態になるのだ。

皮は並べて道を作ったり、小屋の屋根に乗せたりしてた。そいや〜、一人で家作れるのかって思うが重い木等は船にあった三角マストの滑車を使ったり、てこの原理で持ち上げたりした、だからドラゴンの巣の近くの大木の真横に小屋が出来た様になる。

この大木にも見張り台を作ってるが、ただ眺めのよい休憩所（ひなんじょ）になってた。

まぁ人獣達の家のほうは勝手に作られていく若返った人獣達が木を切り運んでくる。ドワーフ達が器用に木を加工していくのだ、本格的な家が作られていくのだいや〜〜凄い、パワーが違うのだ。

今の俺の心の支えはステラになった。

夕方、ステラの体を洗う又ペロリと剥げる。
結構快感だな、化粧の顔パックを剥がすのに似てる、中から美しい肌が出てくるのだ。この日はさらに回復して火傷の痕がほとんど消えて酷い場所くらいになった。元々綺麗な顔立ちだったが、傷が治ると、やはり美しい。ゆっくりなら歩く事もできる。

「後2日もしたら火傷の痕はきえそうだ」

今日も同じ様にドラゴンの肉と不思議な水を食べさせ外にでる。

食事の準備をしているので手伝うことにした、火をつけようとカセットコンロを持ってくる。俺はカセットコンロを大きなライター代わりに使いガスを節約してるのだ。

割り箸くらいの木の枝を用意して先を割って乾燥した草などをはさみ火をつけたらすぐ消す。
効率が良かったのは松脂で松の木の根元などに樹液がついてる、それを枝につけて置くとなかなか消えない、また豚もどきなどのから取れる油も使った、薪の節約にもなるし、ただ黒いススが出るので焼肉などでは使わない。

ま〜〜そのカセットコンロが彼女らから見れば不思議なアイテムなのだ。古代の遺産とか神のアイテムだとかいいだす……面倒なのでガスを抜いて渡した、ドワーフ達は不思議そうにずっと眺めていた。

晩飯を食べ終えるとドラゴン先生の所に話しをしにいく、結構疑問なことが多すぎるのだ。

抜け殻の事や魔法の事などだ……抜け殻については先生も興味があるらしく話にのってくれた。ドラゴン先生やクロやシロは魔力が高いので抜け殻もかなり魔力や効果があるが、隠れ家の人達の皮はほとんど効果はないらしい、俺は思った、きっと妖怪の呪いだ。

言葉について聞くと、先生が俺の抜け殻を食べた時、俺の意識（人格や知識）も先生に入ったらしく、日本語が話せるようになったらしい、昔のままなら丸呑みしてたと……ひぃぃぃ。

そしてあの契約がお互いの、意識を強く結びつけるものであると、

「シン今日本語で話してると思ってるがこちらの言葉だ」

「えええ〜〜？」

「最初に一度通訳の魔法をしただろ、あれは1日も持たないものだよ」

びっくりする俺、

「シンの中にある私の知識を引っ張り出した、思い出させたが正しいか」

忘れてた記憶を思い出すようにそのきっかけを作くり後は自然に話せたらしい。

気がつかなかった……

だから魔法が使えてもおかしくないし、この若返りの力はシンに

共鳴するから（ドラゴンの若返りが２０台になったように）魔力を注げば回復は脅威的になると。それに契約の時、召還と言ったが厳密には、違うらしい召還は異世界の生物などを呼び出すが、同じ世界にいるのを呼ぶのは、転移魔法らしい。シンは異世界から着てるから召還もできそうだが……まぁ今は力が無さ過ぎるまだまだ、修行せんとな……この転移魔法も普通ならかなり上級者がやっと使えるのだが、共鳴ってやつらしい。

簡単な魔法も教えてもらった。ファイアやアイスだ、あとサンダー。

サンダーは使える者がほとんどいないらしいが使えるはずだと、先生サンダードラゴンですものね。

翌日、朝から魔法の練習だ。

「ファイア」

……無理、朝から百回以上唱えてるが何もおきない。

「シン様　お昼ご飯ですよ」

サラが呼んでる、

「はぃ、すぐ行く～～」

いや～～かわいい、食べてしまいたい、いかんいかん。

ご飯を食べ、小屋に行くステラに会うためだ。

魔力がわからないので、試してみるのだ。
回復魔法なら出来ているみたいだからそれを使いながら魔力を知る為だ。
もちろんステラの回復の為でもある。
「ステラ、魔力の使い方がわからないんだ」
「そうですか……最初はわからないものですよ」
「な～ステラなんかいい方法ないかな……」
「そうですね、感覚なら私が教えられるかもですね」
「シン様、手を出してください」
ステラの手に俺の手を重ねる。
「目を閉じて手に集中してみてください、これから魔力を送ります」
ドキドキするけど、特に変わった感じはない……
「すまない……解らないのだ」
「……そうですか、シン様　魔力を強く送る方法が他にもありますが、お試ししますか？」
「それはどのような方法だ？」

少し恥ずかしそうに下を向くステラ。

「それは……口づけとかその他は……」

あれだ俺は、さとった。

あれですね、あれ、大人の関係になるのですね、

「そ、その他でお願いしよう」

俺はやる気まんまんだ、美しいセリアとついに……

「わかりました。準備しますね、目を閉じてお待ちください」

心の中で、女性の準備ってのがいるのだろ。よいよい、いくらでも待ちます。

しばらくしてステラがそばに座り手を触ってきた。

ゴクリ、息を呑む。

「シン様、力をぬいてください」

自然と力が入ったようだ、いかんいかん、なんせ初めてなので、力を抜く。

ブスリ、

痛いぞ、かなり痛い……なんだ??瞬間的に目を開け痛みの場所を見る。

絶句……

腕に短剣が刺さってる……ひぃぃ〜〜。

傷は浅そうだが頭は真っ白だ。

さっと短剣を抜き、回復魔法を唱えるステラ。

「シン様、目を閉じて魔力を感じてください」

痛みはすぐに消え、ステラの魔力が傷口から注ぎ込まれてるのがわかる。

おおなんか分かる、暖かい懐かしい春の木漏れ日みたいだ。そして貴女(あなた)がとても危険な存在だとも……無念。

傷は見る見る回復して傷は綺麗に消えた。

「ありがとう、ステラなんか解ったよ」

「すいませんシン様、魔力を知るとはいえ傷を負わしてしましまして」

「いや　気にする事はないよ」

俺の大きな勘違いだったのが急に恥ずかしくなった、アブね〜危なすぎる。

回復魔法の練習としてステラの体に全身マッサージのように魔力

を込め体を揉み解す。これは特権だな……大満足だ。

早く回復して夢のマイホームから出て行ってもらわなければ落ち着きやしないのだ。

次の朝にぎやかなのでどうしたの？って聞くと、ステラが完全に回復していた。

俺も大喜びしたが……特権が無くなってちょっと、しょんぼり……まぁいい危険な可能性が高いのだ。

ステラは戦闘に強く剣や弓など一通り使えるらしく剣術や体術を教えてもらう事になり。

毎日稽古するようになった。あと基本的な魔法や文字、世間の常識を習う事になった。文字や簡単な魔法はすぐに覚えてしまった、ドラゴン先生の記憶だろう。

やはりステラ危険な女だった、かなり強い。

あとステラにすごい魔法を教わった。

それは転移魔法のインチキ技だ……倉庫とカバンに魔方陣をドラゴンの肉を使って作り物を移動させるのだ。ためしにやってみたらうまくいったので大喜びだ。

これで重い荷物も倉庫に一瞬で運べるす。ばらしい

この成功をきっかけに俺の野望は大きく膨らんだ。

こんな原始的な生活でなく高度な文明をここに入れて、サラと暮

らそう。

早く強くなって町に行きたい自然と修行に身が入る。

魔法の方は簡単な魔法で「ファイヤー」って唱えて人差し指から小さな火が出るようになったり、「スパーク」イメージはスタンガンだ手に青白い電流が走る。みたいな変な魔法ばっかり覚えてしまった。

「アイス」ぽろりと小さな氷が出来る、コップに入れて飲む……なんか違う、実際に見た事は再現しやすいみたいだ。多分攻撃魔法は何回か見れば使えるはずだ。

ドワーフにドラゴンの肉と薬草で良く効く薬をのレシピを聞き大量に作った。正露丸みたいだなこれ。

肉としての使い道より、薬のほうが良く効くし食べ易い。

「最近、シン様見ないわね」

「さっき、うり坊、捕まえて育てるって、ニコニコしながらどこかに行きましたよ」

「シン様最近いろいろやってる見たいですよ。薬草の生える場所を増やしたり、実が生る木を増やしたり……この前はつる芋の種を他の場所に植えてたり」

「あ～私も見た～～、なんか隠れる様にしてたけどトマトベリーの苗を持てごそごそしてた」

「食料不足の前に、増やしてるんだね。流石ですわ」

その頃、俺は新魔法の開発の為、朝早くから夜中まで急がしく働いてた。

彼の目的は新魔法でサラの成長を早め一気に大人まで戻す事だ。ドラゴン先生が大きくなったんだ、できるはずだ。

あった、あれがメロミツバチの巣か、蜜蜂と変わらないな、飼育できるかやってみるか。まず、この痺れ草を燃やして煙で麻痺させて、巣を木箱に移して女王蜂を戻すっと。

巣箱に麻痺した女王蜂を丁寧に入れる、んで、ドラゴンの薬1万倍薄めた液をちょっと飲ませて、いくぜ新魔法、

「成長フェロモン！！」

よし！次は働き蜂だ……彼はドラゴンの薬を作り、容器を洗った水を貯めて、植物や動物、昆虫など食料になる生物に与え＜成長フェロモン＞の魔法をかけまくっていた。

この効果は絶大で木の実、豚やウサギなど大量に増え働き蜂は本気で働いた。ただ彼は知らなかった。

成長ホルモンとフェロモンはまったく違うことを……実が生りそれを食べた人は！？それはしばらく後に起こる。

そんな頃問題が出てきた。

塩などの調味料がほとんどないのと大鍋みたいな調理道具がないのだ。食が偏るのも良くないと思い買いに行こうと話したが……い

きなりこの森を出るのは厳しいらしく外には魔物がいっぱいらしい。

とりあえず戦場跡地に行く事になった。

俺は町に行く気満々だったがまずは近くか、しょうがない……

第４話　村作り（後書き）

よろしくお願いします。

第5話　戦場跡地

戦場跡地には、俺とステラで行く事になった。

他の住民は戦闘経験がないので危険だからだ。

場所は南に3日ほどの距離らしい……ちょうどドラゴンの縄張りから出るか出ないかのぎりぎりらしく
いつ出会ってもおかしくないので、十分に気をつける様にと念をおされた。

「サラ行って来るね」

笑顔で握手する、俺は少し力を入れギュッと握る、サラもゴキ……

「すいません……ランクアップで力の加減が」

「大丈夫……慣れるまでしょうがないよ……じゃ」

痛って〜〜サラも危険だな、今のうちに教育しないとな……

「シン様、気をつけてね〜〜」

・3・

シロとクロに乗って走る事1日……疲れた。

日がくれだしたころ戦場跡地に着いた。

1年ほど経ってるがその時のまま残ってた。

「やっと着いたな、意外にそのまま残ってるので使えそうな物は沢山ありそうだ」

ステラは辺りを見ながら満足したようにうなずく。

「今日は疲れた早めに飯を食べて休もう」

俺はこわばった体を伸ばしながら居心地の良さそうな場所を探す。

「シン様、何をしておられる」

キャンプの準備をするために木を集めてると声がかかる。

このような森の中で火を焚くのは危険らしい、なるべく小さく火をつけ、さっと料理してすぐ消すのだ。魔物は火を恐れるが、火の近くには人などがいる事を知っている。町の街道沿いなどは、魔物も恐れて近づかないが、こんな魔物の巣みたいな場所は火は危険らしい。

ステラは森から桧の枝みたいな物を取ってきて、葉を潰し体に塗っている。これはにおい消しらしい、あと虫除けにもなるみたいだ。

俺もステラに習って同じようにする。

近くに簡単な罠をいくつか仕掛ける、転び易いようにロープを張ったり、別な場所で音がするような罠だ。寝る場所は背後を守る為、木や岩の近くで隠れる様に眠る。夕食前から水は控えて小便をしないでいいようにするなど……全然休まらないよ、これじゃ。

それに期待してた甘い夜なんて無い事が分かった。

ステラに野宿を教わりながら戦場跡地の探索が始まった。

戦場跡地は意外に死体などはなく、焼け野原に少し草が茂ってる感じだ。所処に大きな岩やこげた倒木がある、結構広い陣だったみたいだ。遠くまで見通がよい。

しばらく行くと、武器置き場らしき場所があり鎧や剣などが見つかった。

使えるかどうか解らないがそれらをカバンにどんどん入れて倉庫に送る。後で修理すればいい。資材置き場にはいろいろあったが、ほとんどが使い物にならなかったが、木の箱や丈夫な布に包まれた中には、新しい服や布、ロープなどいろいろある。　釘や金槌、スコップ、鉈や鎌、鉄がしっかりしてる物は全て送る。

そしてついに見つけた料理場だ。

「ステラ、塩があったよ」

丈夫な布の袋に塩の結晶がいくつもある、かなりあるな。

大鍋が見つかった時は大喜びした。

調理器具も全て送った。木は腐っても鉄の部分がしっかりしてたら修理できるからだ。　そして幸運な事に小麦やジャガイモなどが野生化して生えてるのを見つけた。

ここの気候はほとんど夏に近いので収穫時期が決まってない。
小麦の苗を土ごと取って送ったり、生えるか不明だが種も送った。
ジャガイモとにんにく、唐辛子、たまねぎも見つかった。
もちろんドラゴンの薬１万倍液とフェロモン魔法をかけて送った。
死体を見つけたら鉄の装備などははずして１箇所に集め燃やした。
ステラはいつも最後にお香のようなものを燃やして死者の為に祈った。そのままだとアンデットになるかも知れないからだ。

・３・

３日後

使える物がないか探してると、遠くで声が聞こえる。

そちらを見ると、６人ＰＴのやつらが猪を狩ろうとしてる。

子供みたいに小さい、なんだあれは！？ステラに聞く、

「あれは、ゴブリンの子供だな」

あれがゴブリンか～～眺めてると、あっやられた……ゴブリン達は全滅した。

あまりに弱いので見に行ってみた。うん、醜いな、しかしあの老婆よりましだ。

棒でつんつんしてると、

「おい、お前たすけろ」

よく見たら怪我をしてるが、死んでない。ゴブリンなんて生命力！！

「おお！！ゴブリンがしゃべった、すげー」

「いいから、たすけろ」

「あれだろ、助けたら襲ってくるだろ、それに、かわいくない」

そうか……じゃあな……

「少し話しだけでも聞いていけ、話せるゴブリンなんて珍しいぞ」

と言って話し出した。

わらわの名は、アセリーノ・ゴブリン・三千三世、3日前に生まれた女王だ、名門中の名門エリートゴブリンだから、言葉も話せるのだ。わらわが生まれた次の日悪夢が起きたのじゃ、伝説の魔獣、白虎が住処に襲ってきた。父や母を始め全員で勇敢にも戦おうとしたが、一瞬で全滅してしまった。

運よく生まれたばかりの、私達6人が生き残った。

今日、国を再建しようと、わらわが女王となって初戦で全滅したのじゃ……無念じゃ、

「さぁ、わらわの首を取って武勲にしてよいぞ」

なんて間抜けなやつらだ、武勲にはならんし、犯人はシロか、助けてやるか。

「仲間は、お前らだけなのか？」

「そうじゃ」

「しょうがないやつらだ」

瀕死のゴブリン６匹集めて、ドラゴンの薬を飲まして、回復魔法とフェロモンの魔法をする。明日赤ん坊になってたら大笑いだ。しばらくシロとクロは遠くで見張ってもらおう。

「すまぬ助かった」

「「「ありがとうございます」」」

「しばらく、ここに泊まるからお前らもここにいろ。その間に強くなれ」

「「「わかりました」」」

「まず、お前たちは弱い、猪なんて無理だ。まずは小物や木の実など取って生きる事を覚えろ、油断や焦りは禁物だ。分かるかアセリーノ」

「すいません」

この辺りの木の実や薬草、毒など教えながら採取する。

ここも3日目なので安全と見て普通にキャンプする、そして2日前に教わった、野宿の仕方をいかにもって感じに話す。

こっそりクロが取った猪を持って帰り皆で焼いてたべた。

ゴブリン達は、ステラを見てびびりまくってた。

「変な動きしたら、殺すわよ」
って、ニヤリ、俺もびびった。

翌朝……ゴブリン達は普通だった。赤ちゃんにならなくて、よかったね。

こいつらのＰＴをゴブリン・シックスと名づけた。

適当にさびた武器を拾って少し稽古する。

ステラが教えるんだけど皆で聞く、もちろん俺も知らないからだ、まぁ剣や槍や弓などいろいろな武器の簡単な説明と使い方だ。

昼飯を食べ、その後はゴブリン達は、狩をしにでかけた。

俺達は使えそうな物を探しながら燃えるものは燃やした。

死体や古くなったテント、人工的に作られた物は燃やすのが一番いいらしい、そのままだと悪い気が集まりやすくなり魔物が増えるそうだ。

ゴブリン達を見てるとクモなど昆虫をむしゃむしゃ食ってたりするので、あまり見ないことにした。

夕方、ゴブリン達がうさぎを3匹取って帰ってきて、シン先生、やったよ、ほめてほめてと集まってきたが、かわいくないので、皆で分て食べろとウサギを渡す。

ゴブリン達は、ウサギを滅多切りにして、毛が付いたままモシャモシャ食って、ウサギうめ〜〜っと叫んでる。

その姿が老婆達を思い出させ、背中が冷やりとしたので、このままだといかんと思い、少し教育することにした。

「バカモン、それじゃただのゴブリンと同じだ。エリートゴブリンはもっと、おしゃれだと聞いたが」

まったくの嘘だがまぁいい。

「「「ええ??」」」

俺は残り2匹のウサギの皮を剥ぎ、味付けして、こんがり焼いて渡した。こっちの方がうまいだろ

「「「うめーー」」」

その味に感動して今度からそうすると、うなずいた。

そして、火の魔法を教えたらなんとか、アセリーノが出来た。

練習したらもっとでかくなると教えておく。俺できないけどね。

俺のカバンから昔とっていたウサギの皮と交換して（流石に生で

は加工できないので）ちゃんと説明しながらアセリーノの水着を適当に作った。

適当ビキニ、スタイルに恥じない出来だ。

目も痛くない、このぼろさ加減がしっくりくる。

「アセリーノ、女王なのだから身だしなみも気を付ける様に」
と汚い体をさっさと洗えとタオルを渡し、綺麗になったら、水着を投げ渡した。

他のやつらも、俺も、私もほしーいって顔してるので、明日取れたら作ろうと話た。

「「「明日はがんばって取るぞ～～おぉぅ！！」」」

ゴブリン・シックスに輪が出来た。

ついでに毎日体を洗い、歯を磨くなど教え回復とフェロモン魔法をした。

ゴブリンは馬鹿と思ってたがこいつらは優秀だ。

次の日、朝ご飯を食べ訓練して昼飯、それからゴブリン・シックスは狩に出かけた。

夕方、7匹のウサギを取ってきた。

シン先生やったよ～～ほめてほめて、とくるが、やっぱり、かわいくないので

「スキあり」

ペチっと棒っきれで叩いてやった。泣きそうだったので、すぐに回復魔法をして、よいショした。

6人とも傷だらけなので回復とフェロモン魔法をして、汚い体を自分で洗えとタオルを投げ渡して洗わす。

汚いとまたペチっとやって体で覚えさせた。文句を言いそうだったが、

「お前達はゴブリンの中のゴブリン、エリートゴブリンだろ！その誇りを忘れるな！！」

「「「はい、シン先生」」」

「よし！！ウサギの皮剥ぎ、やるか！！」

皆で皮を剥ぎ、ゴブリン達に味付けをさせて、焼いて食べた。

味付けのうまいやつ2人にコックをしろと命令し、皮がうまく剥げなかったやつは、薪でも拾ってこいと命令した。

やはり器用、不器用があり、出来ないやつはひどかった。

器用なやつに服の作り方を教えながら、5人の服を作って渡した。

顔は不細工だがマシになったな。しかしフェロモンの魔法が効くのか見る見る成長する。

今日はこっそりクロやシロが取った猪が大量だったので一つだして、丸焼きにして食べた2日は持つだろうと思ってたが次の日の昼には食べきった、すごい食欲だ。

次の日、朝稽古をして罠の作り方をいろいろ教えた、落とし穴を作り追い込むやり方や、待ち伏せなどだ。

ゴブリン・シックスはやってみるって張り切って出て行った。

夕方、うっほ！うっほ！かけ声と共に木の棒に鹿を吊るして帰ってきた。

俺を見るなり4人が走ってきてシン先生やったよ、やったよって騒ぎ出したので「ばか者！！」ペチっと叩いてやった。なんで？って顔するから

「鹿を持ってるのは2人だ、あいつらは手が使えない、今攻撃されてみろ、2人は死んで獲物も取られるかもしれない、4人は前後左右で敵を警戒しながら2人を最後まで守るのだ、それがPTだろ、お前達は6人しかいないのだ、1人怪我でも大変になる仲間を大切にして無理はするな！！」

話すと4人は、しょぼーんってしたので、6人がそろったら

「よくやった、流石エリートゴブリンだ」

と少しほめてやって回復とフェロモン魔法をした、皮を剥ぎ肉を解体して、タオルで体を洗わせ保存食の作り方を教えた。

しかしビックリだ。鹿、俺も初めてだったから、皆でシカうめーっと叫んでしまった。

次の日、訓練とＰＴの戦い方、３人を前衛、剣や斧と盾、後衛が３人が小型の弓や槍がいいと教えた。

その辺は皆で話して決めろと言ってたら、アセリーノが私は魔法で行くと言い出す。

やらせてみたら、かなりよかったので魔法になった、でも短剣などで訓練は毎日するように教えた。

ゴブリン・シックスは張り切って出て行った。

３時頃、見るも無残にボコボコになって帰ってきた。ピンクダチョウにやられたらしい。

あと少しと思った時に背後からもう１匹羽、来たらしい。

正直ほっとした、無事帰った事と１度は痛い目に会わないと、いつか酷い目に会うからだ。

今日は仕方なしに回復の水で綺麗に拭いてやって傷口に薬草を塗りドラゴンの薬をかなり薄めた水を飲まし、回復とフェロモン魔法をした。

夕方には、ほとんど良くなってた。

晩御飯を食べながら反省会をした。

まず周りに敵が何匹いるか知ることから、敵の弱点は何処かとか、いつも回りに気配を配るなど話てたから、言ってる間違いではない、しかし、その前に、君達は弱いのだよ。

「ばか者、戦う前に最悪の時を考えろ、逃走経路をまず考えるのだ。絶対に逃げれる道だ。死んだら終わりなんだ、逃げるのも勇気、逃げ道に罠を仕掛けて置くのもいい。まずは生きて強くなるそれからだ。」

厳しくしかった。

「「「はい、分かりました」」」

今日は早く寝よう。しっかり反省して明日の力になればいい。

次の日、朝飯をしっかり食べ、状態を見る、めちゃ元気だ。回復半端ねー!!

訓練して怪我の直し方や、毒の時どうするとか、骨折時の処置など教えた。

昼飯をたべ、ゴブリン達は狩に出て行った。

夕方、周りを警戒しながら、ゴブリン・シックスが帰ってきた。猪を担いでる見事だ。

「「「シン先生やりました」」」

振り返り際に木の棒で……スカ!?見事、誇らしげなゴブリン達の顔を一人一人見る。

うむ……やっぱり、かわいくない。

「よくやった」

猪の皮を剥いで肉をばらして、焼肉パーティーをする。

「「「うまーー」」」

笑顔もやっぱり不細工だった。しかし、にぎやかに食べた。

「お前達はまだまだ弱いが、生き抜く力はもうある。明日が最後の修行だ」

次の朝、訓練してお別れの挨拶をする、

「もう、お前達の住処に戻っても大丈夫だ。そこで国を再建しろ、俺は北に3日行った所にドラゴンの巣がある、その巣を守ってる。もしなにかあればそこに来い。」

「「「ドラゴン……すげ〜〜」」」

「しかし、緊急でない限りここより北には行かない事だ。ここからドラゴンの縄張りだ。これを渡す、これを見せればドラゴンも話が分かるはずだ」

壊れたルアーで作った首飾りをアセリーノに渡した。針は折れてる。

キラキラ輝く魚の首飾りを見て、皆、すげーすげーと言って、感

動で泣きそうだった。

「世界に１つしかない、珍しい物だ。大切に守れ」

「「「はい、先生」」」

後、釣り針が入ってた入れ物に、ドラゴンの薬を１個を１０個に小さくした、小さな薬玉６０粒を渡した。

小さいゴブリンには普通じゃ効き過ぎると思うからだ。

「これはめったに手に入らないドラゴンの薬だ、怪我や病気などで重症な時１つ飲め、大切にしろ」

「「「ありがとうございます」」」

後は戦場跡で拾った、ぼろぼろ武器を適当に渡した。

ゴブリンの住処はクロとステラに掃除してもらったので、死体などはないはずだ。

「「「さよなら、シン先生」」」

「おう、毎日訓練して絶対、死ぬなよ～～」

涙の別れをした。しかしゴブリン・シックスはすごすぎたな！勝てる気しね～～

ドラゴンの薬とフェロモン魔法の効果か、その後、大繁殖してその名を成す事になる。

；3；

戦場跡も大体片付いたし、明日帰る事にした。

ゆっくり昼飯を食べてから、のんびりしてると人の気配がする。

そこには、いかにも戦いなれた感じのドワーフが立っていた。

俺は警戒しながらいつでも剣が抜けるように体を動かしながら話しかけた。

「ドワーフか、魔物かと思ってびっくりしたよ」

「若いの警戒せんでいい、騎士でもなさそうなので、なにもせんよ」

人懐っこそうに笑う。

「騎士だとなにかあるのか？」

「脱獄兵になるからのう……まぁこの戦じゃ罪も軽いと思うがの」

「なるほど、大変だなおっさんも……前に会ったやつにも騎士と間違われたしな」

「ほー前に会ったとは……どんな人であったか　いや　すまん人を探しておってのう」

俺は出会った事を話しここに食料を探しにきた事も言った。

「なるほど、そうであったか。しかし、お主嘘が下手だのう」

「嘘などついていないが」

ドワーフのおっさんの何処にこんな殺気があったか解らないが、いきなり襲ってくる。

「シャドウを従えてるのは貴族だけじゃ」

ドーン！

突然の殺気で一瞬遅れる。

「シン様、危ない」

背後から声が聞こえて岩の影から出てくるステラがドワーフの1撃を止める。

「大地の精霊よ、絡み取れ！！」

ドワーフの呪文と同時に俺を蹴り飛ばすステラ、

「ステラ！？」

振り返るとステラは土の牢に入っている。

「貴様ぁぁ！！」

俺は腰の剣を抜きドワーフに切りつけるが、

ガシャン！？

異様な音と共に剣が砕け散る。

ドワーフの戦斧は俺の剣を砕いたのだ。

砕けたと感じた時にはロングソードを手放し身をかがめて短剣を手にもう1歩踏み出した。

短剣の距離、後は素手でないと無理な間合いまで一気に迫った。

バキン！！

短剣がへし折られた！？

ドワーフは戦斧の勢いを殺さず、戦斧だけを手の中で回転させて目の前の短剣をなぎ払ったのだ。

一瞬殺気が目の前をかすめたので、手がわずかに止まったが。

そのまま刺せば片手を持っていかれたにちがいない。

とっさに短剣を手放し俺はさらに踏み込み素手の拳に「スパーク！！」と念じ放った。

青白い電流が拳を包むと同時に相手のわき腹に打ち込む。

バチバチ！！音と共に吹き飛ぶドワーフ。

イメージはスタンガンだ、人には初めて使ったがうまくいった。

しばらく動けないはずだ。

「お主やりおるのう」
って起き上がってきた。

ゾンビかおっさん！！

ステラも捕まってるし、仕方ない……

両手を地面につけて叫ぶ。

「シロ、クロ　召還」

左右に青白い魔方陣が浮かび、中からシロとクロが出てくる。

こんな事しなくても呼べるのだが、とにかく見た目がかっこいいのでやってるのだ。見た目がね。

ステラを守るように移動しながらカバンから武器を探し取り出す。

さびたロングソードだった、渡し忘れたか……無いよりましか。

相手をにらむ……

えっ？

「すまん、すまん　ガハハ」
と笑いながら武器を捨てて座り込む、殺気が抜けて子供のようにクロとシロを見てる。

「それならステラを開放しろ！！」
「本当にすまなかった」
と、いって頭を下げる。
背中にステラ気配がする。
「ステラ大丈夫か？」
「はい、シン様」
何処にも傷はないようだ。
「白虎に影狼か……信じられん」
ぶつぶつ言いながらドワーフは不思議そうにしてる。
「突然どうしてなんだ？」
俺は聞いた。
背後にシャドウがいたのに気がつき、何処かの貴族と思い捕まえて真実を聞こうと思ったらしい。
最初の1撃は殺気を込めたが、手加減してあり出てきたシャドウを捕らえる為だったと。
普通の貴族なら、腰を抜かすか逃げ出すらしい。
それなのにおぬしはシャドウを見て激怒し攻撃してきた。

そんな人間は今まで見た事なく、恋人を奪われたような顔だったらしい。

シャドウは見た目から黒く魔のイメージが付き易いからめったに人間の前に姿を見せない種族で、しかも暗殺や諜報に長けてるから、国か一部の貴族が裏で奴隷を買い育ててるのが常識らしい、一般人は見るだけで怯えるほどだ。

ステラやはり危険だったか。

おかげで殺されそうになったが……ガハハって笑った。

「おぬしの剣に殺気がなかったのでたすかったよ、人を殺した事がないだろう」

「はい、人殺しなんてしないですよ」

「なるほど、だから助かったか最後の魔法は殺さない威力だったか、剣はシャドウに習ったのか？」

「そうです」

素直に答えるクロやシロが警戒してないから、信用できるみたいだ。

「なるほどな、あんなやり方は普通しない！捨て身の攻撃だ、生きたいなら生きる剣を学べ」

殺(やるき)きないのに、もっとも効率のいい動きだったらしい。

ゴブリン・シックスに言った事を言われてる気がする。

ステラに、このじいさん大丈夫かと聞けば

「信用できる」

と話すのでこのじいさんを信じる事にた。

第5話　戦場跡地（後書き）

よろしくお願いします。

第6話　村作り2

このドワーフのおっさん、ダグラスって名前だ。

ダグラスは一流の鍛冶屋だったらしいが、トラゴン討伐の為国から武器を大量の依頼と出兵命令をうけた。何とか武器を作り国に収め、村を代表して十数名が戦場に出て、ダグラスは運良く生き残り村に帰ったが村は荒れ果ててた。

村の人の話ではダグラスが村を出てすぐに、盗賊に襲われた跡で多数の村人が殺されたりさらわれた後だった。必死に行方を探したが手がかりが無く、奴隷市などを探してた時、ほとんどが売られて戦争に連れて行かれたと聞く。それから戦場跡で妻や村人を探し回っていたらしい。

1年近く経ちもうドワーフの村に帰ろうと思い戦場跡近くを通った時、煙を見たのでもしかしたらと思い来たらしい。

俺はダグラスに簡単な説明をして聞いてみると話し、木の板にダグラスを知ってる人がいないか書き倉庫に送った。

「シン、お前の村には何人くらいいるのだ？」

「22人ですが、俺以外は女ばかりだよ」

ニヤリと笑うダグラス

「ええの～ハーレムではないか、ドワーフは何人だ」

「8名です……ハーレムでもないんですが」

「何を言っておるワシが若かったら、ウハウハで寝ささないぞ、しっかりせい！」

バシバシ背中を叩きながらハーレム作り方講座を開くダグラス。

ハーレム……いいかもしれない。メモにちゃんと取りながら考える。

「しかしこの森から出た事ないとは、一度は街や村を旅するのもいいかもな」

「そうですね、俺も旅をしてみたいんです」

「しかし　クロやシロは人前に絶対見せたらいかんぞ、魔王と間違われる」

「やっぱりそうですか、よほどでない限り使は無いようにします」

「一人で行くほうがいいかもな、ステラさんかのぅ。シャドウも恐れられるし、他の人を守れるならいいがまだ　厳しいかもしれない」

「なるほど……」

そろそろ返事きてるかと思いカバンを見る。

ええええそんな！！

そうドワーフ最強の妖怪、ブー長と心で呼んでたのがどうも妻ら

しい。

「ダグラスさん、嫁さんは俺の村にいるみたいだ」

「なに！！　生きてたか」

うれしそうに笑う目には少し涙がうかんでる。

「シンの村は何処だ？」

「ここから歩いて3日かな」

「今すぐ出発しよう、連れて行ってくれ」

「いまからですか？」

「今すぐじゃ」

強引に押し切られ帰ることになった。

シロとクロを呼び出し俺とステラがクロに乗り、ダグラスはシロに乗って出発する。

夜は危険なので、ゆっくり走り明け方には村についた。

「ダグラスあそこがそうだ」

「そうか　ダイアン～～」

叫びながら走っていく……涙の再開と思ったが。

妻の顔見て……絶句！！

あ、若返ってるの話してなかった。

最初はポカーンとしてたが、だんだん理解してきたらしく仕舞いには妻に手をだしたろ～って怒り出す。

ダグラスの話では「あんな　絶世の美女にてを出さないやつはいない！！」らしい。あのブー長が！？

「シン様になんてこと言うの」

バシバシ、ダグラスを叩く妻、まぁいい危険人物が一人いなくなった。ダグラスも苦労したのだな、俺にはわかる、そしてあちら側へと墜落ちたのだね。

その時……膝を崩し苦しそうにするダグラス。

えええ！？　昨日戦闘で受けた傷と疲労で限界だったみたいだ。

慌てて服を脱がすと結構傷が深い……良く我慢できたものだ。

ベットに連れて行ってドラゴンの肉で作った薬を飲まし回復魔法を使う。

昼からはダイアンに任せて俺も寝る事にした。

ダグラスは次の日も寝ていて2日目の朝起きた。

起きたダグラスは無口になって一日中村を見て回たり妻と話したり考えて夜、

「シン　貴様のハーレムは俺がのっとる！！」

ニヤリ

「えええ～～」

「てのは冗談だが、本気で村を作るなら協力しよう」

焦ったぜ、ハーレムはのっとてもいいがサラはやらない。

「そこまで考えてなかったが……いいのか？」

ダグラスの話では、ここの土地は非常にいいらしい、水源もあり土地も肥えている、魔物が襲ってくる心配今の所ないし、国から税金の心配もなく盗賊もいない、もし襲われても守り易い地形だという。

それにこの周りには、同じ様に隠れて暮らす人が数箇所あるらしくその人達も仲間に入るかもしれない、なによりドラゴンに襲われないって事だ、村に来なくても伝えたいらしい。

良く見るとダグラスの顔が少し変なのでもしかしてと思い

「ダグラスさん　目を閉じて動かないでほしい」

と突然言った。

俺は白々しく変な呪文を唱えながら

「我とドラゴン先生の祈りで神々に奇跡の力を、東南西北リーチ一発うんたら、かんたらチョンボ！！
」

九字が解らないので怪しい言葉を並べながら、ダグラスの顔の皮を、ペロリとはがす……

神の奇跡を見るように皆さん騒ぐ……おっさんサラを奪うなよと心で祈た。ドワーフのブー長、今から俺は同志だ、激しく応援するぜ。

次の日、流石ブー長、いやダイアンと安心する……見た目３０代に若返ったダグラスは妻に尻を叩かれながら新居を作る事になった。俺も快く手伝った。すばらしい。なるべく遠くに家は立てさせた。ダグラスのおっさん、片足は確実に墓場に入ったぜ。

皆で作るので作業は早い、戦場跡から持って帰った道具があるからだ。

村作りは本格的で、畑から水路までいろいろ計画が作られた。

俺とダグラスは他の隠れ里を回る事にした。

ダグラスに連れて行かれた場所は、大体洞穴で酷い状態だった。

俺達は薬を飲ませ、不思議な水と食料を置いて次々と回った。

もちろん怪しい呪文を大げさに唱えながら薬は飲ませた。

ここで効果のあったのがペットボトルだ。

ガラスやプラスチックがないみたいで、魔法の入れ物だったらしい。

病は気からでないが、カバンから次々と出すペットボトルの不思議な水は効果はばつぐんだった。俺達の村の場所を教え、移る気があったらいつでも歓迎すると話し次の隠れ里に向かった。

隠れ里を全て回って村に帰った。

ぞろぞろと人が集まりだし、村は大変な事になる、家作りや畑つくりに毎日追われるのだ。

村人は１４０名近くになり、テントだらけになった。

再会を果たすカップルや夫婦で引っ越してきた人たちもいたが圧倒的に女性が多かった。

男４０名で女性１００名くらいだ。人間はいなかったが、全員若返っていた。

男たちはどう見ても美しくない、妖怪に求愛してカップルなどができた。俺もフリーな男に妖怪どもを進んで与え彼らは泣きながら喜んだ。俺もやっと妖怪退治が出来、心が落ち着いた。そしてダイアンありがとう。彼女の力あってこそ出来た計画だ。

そして俺の好みの女性達が俺の周りに集まった。サラすまない、ハーレムができた。

その夜、家に帰って寝ようとした時、俺の体に異常がおきた。

頭の中で声が聞こえてきたのだ。

「やっとつながった、俺、ベニクラゲよろしく」

キョロキョロ周りを見るが誰もいない。ふ、今日の妄想はやばすぎたかな、気をつけよう。

「無視するな、返事しろ」

また声が聞こえる。安心しすぎて、疲れが出たのだな……取り合えづ返事してみるか。

「どこにいるんだ？」

「お前の右目に住んでる」

えっ！！？

「住んでるって？」

「そうだよ、寄生虫みたいなもんだ。」

終わった……聞かなかった事にしよう。お休み……耳を塞いで目を閉じる。

「殺さないから安心しろ、無害だよ。それどころかお前の為になる」

「お前まさか脳に直接はなしてるのか？？」

「そうだよ、存在してる事を教えようと思ってね」

「あの時融合したクラゲか？」

「ちょっと違うが似たようなものだ」

ベニクラゲの話では……ほとんど仲間はシンと融合したがわずかに生き残って、この世界に来たやつもいた。

クラゲは海の中でしか生きられないからすぐ、卵の状態にまで体を戻し運よくシンの右目に入り込んだのだ。俺の目は海か！！

それから魔力なるものを吸収して進化を繰り返しやっと会話できる様になったらしい。

それって……どうやって進化してクラゲが話せるんだよ。

「俺の脳でも奪ったのか？」

「その通りだ」

ひいいいいぃ

「大丈夫だ、お前の脳はスカスカだったから、一部つかってるだけだ」

スカスカ〜〜！？なんてこと言い出すのだこのバカクラゲめ！！

「ちなみにお前の記憶をほとんど見たが、実にアホだと解った……

脳は1割も使っておらず、その大半がはスケベな事ばかりだったからな」

ガク然とする俺……こいつは殺(やらな)さないといつか殺(ばらされる)される

「大丈夫だ、これからは俺が無い頭を良くなるようにしてやる、言い忘れたがお前の考えてる事は解るからな、頭が2つになったと思ってあきらめろ」

慌てて船の所に行って、割れたガラスで右目を見る……

コンタクトレンズ見たいなのがヌルっと動き!?

ひいぃ、今なんか、ちっさな目が合ったよ。

ついに人間ではなくなってしまったんだ……ショックで力なくベットに入り眠った。

次の日ドラゴン先生の所に行って、涙目でどうすればいいか聞いた。

「先生〜〜右目に変な生き物が寄生したんです〜〜」

「ふむふむ……詳しく話してみろ」

今回は真剣に話を聞いてくれてる……

しばらく考え込んでいたがよく目を見せてみろって話になり、顔がくっ付くらい近づき、上からのぞきこむ。襲われそうだ。

その瞬間、キラリと輝く液体が左目に入った。嫌な予感がする。

「シン大丈夫だ、そいつらは役に立つ」

それってまさか……そんな～～

慌てて左目を鏡で見る。

「よろぴこ……」

って感じに左目の中にいるやつと目が合った。

はぁ終わった、もうすぐこいつらに乗っ取られる。

一人落ち込んでると、ダグラスがやってきて

「ま～気にするな、なんとかなるよ」

バシバシ背中を叩いて陽気に笑って去って行った。

全然慰めになってないよ、おっさん。

村を出ようそして海を目指して旅をするしかない。

こいつらも海に行けば自然に帰れるはずだ。

ハーレムを作るのはその後だ。

このままではハーレムの前に目玉の悪魔か、ドラゴン先生に殺される。

俺は旅に出る準備を始めた。

第6話　村作り2（後書き）

よろしくです

第7話　肉体改造

俺は旅に出ることを村の住人に話した。

現状、村にも必要なものが沢山たりないので買出しくらいと思ったのだろう。

賛成する人が多かった。

その日の夕方やっぱり来た、

「なんて汚い体なの……」

女性の声が頭で響く……

「すいません」

とりあえず謝っておく、危険な存在は間違いない、左目のやつは女か面倒だな……クラオとベニコにするか……まずベニコの性格をよく知り、彼女を手の平で……もとい、目の中で上手く転がさないとな。

ドラゴン先生の中にいたやつだ、知能も高そうだが性格も悪そうだ。

「あなたも何やってたの」

クラオにも怒ってる、おお仲間割れか……クラオと組むしかないな、ここで折れたら負けだ。クラオがんばれ、男性代表としてガツンと言え、クラオ俺の心が分かるのだろ昨日の夜話したでないか、

友情を思い出せ、やつはまだ完全に俺の脳(こころ)を探知(しはい)してないはずだ。

「明日は肉体改造するわよ、手伝いなさい」

いきなりクラオに命令してるぞ。あぁ終わった、もうクラオは駄目だな生存競争で負けを認めている。心の折れた音が聞こえた気がした。

そして今、なんて言った～ひぃぃ、いきなり改造って……やばすぎる極悪だ。

明日はもう、人ではないかもしれない。肉体改造ってまさか俺は新しい人形(デク)として実験されるのか、「あれ？間違ったかな！？」ってちょっとのミスでも精神が破壊されそうだ。

俺は腹を決め夜這いすることを決めた、今しかない、今夜しかない。

俺はサラを呼びだし、説明してまず契約の実験をさせてくれと頼んだ。

「契約ですか？普通にできますよ！」

「なんだって～～今すぐしよう今すぐだ」

「ありがとうございます。シン様うれしいです」

人獣族では契約は結婚みたいなもので家族になるのと同じ感じらしい、契約者の力をもらう代わりに忠誠を尽くす。希望の相手と契約するのは最高の幸せらしい。よかった、安心したよ。俺もサラが

大好きだから。

「で、契約はどうすればいいの？」

「シン様の血を私が飲み、私が契約の申し出をするので、シン様、私の名を呼び契約すると言えばできます」

分かった、俺はナイフを取り出し、ブスと腕に刺した。

「サラ、好きなだけ飲んでくれ」

結構、血は出てるが気にしない。俺には明日はないのだよ……

「少しでよかったんですが。すいません、いただきます」

目を閉じてペロペロなめる……なんか少し超ロリを理解した気がした。

「準備が出来たら言ってくれ」

「シン様、私の名はサラ、これより契約します。私の名を呼び契約してください」

「サラと契約します」

「ありがとうございます。契約できました。」

あれ！？大きくならない、おかしい。そっか召還するんだった。やばい、今意識を失いかけた。出血しすぎたか？慌てて止血して、話す。

「今夜はサラと2人で寝たいのだけどいいか」

「はい、ご主人様」

「召還するのでちょっと待ってて、あ服ヤバイかも……破れそうだな、脱いでタオル巻いていて」

サラはうれしそうにうなずき、夢のマイホームに召還で来てくれることになった。

俺はマイホームから合図を見て召還した。

「サラ、召還」

白く光る召還陣から大人のサラが出てきた。美し過ぎた、触れるだけでバチがあたりそうだ。

「すまないサラ、明日から人で無くなるかも、知れないのだ、初めてはサラがよかったのだ」

「大丈夫ですよ、シン様は化け物の様にはなりませんから」

明日の肉体改造に、怯える俺をやさしく抱きしめてくれる。

「シン様ありがとうございます、私も初めてなんです、これからは私でよければいつでもお願いします」

そして二人の熱い長い夜がはじまった。

朝食を持ってサラが来た。

「おはようございます。シン様朝食です」

声のほうを振り返ると、さらに美しくなったサラがいたが、幼女に戻っていた。

「おはよう、もしかして、またランクアップしたのか？」

「はい、やだそんなに見ないでください、恥ずかしい」

めちゃめちゃうれしそうだが、すこし俺はがっかりした、しかしもう思い残す事はない、かかって来い肉体改造、今俺の精神は最高に安定してるぜ。

二人で朝食を食べ外に出ると……痛いような目線が刺さる、なんだこれは……やばい犯されそうだ。

ドラゴン先生の指示なのか怪しい薬も作られてる……計画的だったか。

逃げるように部屋に入って旅になにがいるか考えてると、それが始まった。

肉体改造だ……

急に吐き気がして、黒いタールを吐いた。タバコかこれは……愛煙家だった昔を思い出す。

「まずは肺を掃除して、それから内臓や骨にたまった毒をだすわね、なにこれ、メチル水銀や鉛、ダイオキシン、アスペストまで。微量だけどいろいろある、ひどいわね、プルトニウムこれなんか不思議だわ集めて研究して見ましょうか、それから筋肉繊維や骨の強化、腱……」

最後まで聞き取れなかったが、プルトニウムはいかん、捨ててくれと激しく祈った、さらに気持ち悪くなりゲロゲロと体の毒を吐く俺……科学反応でも行ってるのか……悪魔め！！

心配してステラとサラが看病してくれる。

夕方まで肉体改造が続き毒を吐きまくった。

やっと落ち着き夕食を食べ怪しい薬を飲み、ふらふらと布団にもぐったが……！？

そこには全裸のステラが待機していた。

妖艶な瞳で逃しませんよと言わんばかりに、じゅるり。逃げる元気も無い……すまないサラ。

後は、もうクモの巣にかかった昆虫と思いステラに体を任せる。

激しい夜が2人を待っていた。

翌朝めちゃめちゃ美しくなったステラがいたのは言うまでもなかった。

俺はあまり気が付いてなかったが新しく住みだした村人は、最初から夫婦だったり新しくできたカップルでイチャイチャしたり、若返って体力も復活したりで夜な夜な激しく契っていた。

愛し合う音がダイレクトに聞こえるのか彼女たちは不満をつのらせていた。

カップルにならなかった美女軍団は６０名は、シン様親衛隊なる結束を作り誰が一番尽くすかと競い合あいだし、サラに手を出したことを切欠に暴走しだした……後で分かったがドラゴン先生が薬の調合を指示した時「旅に出たらしばらく会えなくなるので、皆、思い残す事無い様好きにしていい」と許可を出していたのだ。

毒を吐くことはなくなったが肉体改造されてる俺は毎日激しい筋肉痛で動けなくなり寝たきり状態だった。

食事を持ってきて、俺を襲って帰る、看病といって来て体をさすってくれ最後に犯される。アリ地獄に落ちたアリの様に動けない体で抵抗したが無理だとさとり、無抵抗の戦いが始まった。ガンジー作戦、今から俺は石だ、石は痛みも感じない。さっとったぞガンジーは石。

次の日、サナギから孵化した蝶の様に美しくなる彼女たちを見た他の女達は、

「また出遅れた今日こそは……私がシン様を」

悔しがりまさに1日中襲われることになった。ドワーフはまだ良かった。事がしなやかで、しかし人獣達は激しすぎた。今俺筋肉痛と叫びたいが痺れて動けないし話せない、この時、心にあった、「

にゃ」って話す人猫リストは削除された。人獣系は危険……ドワーフ、考えてよし。

その日から、俺は人獣を見ると蛇ににらまれたカエルの様になり、素直にあきらめた。これってドM計画か？俺は洗脳されないぞと意思を強く持った。ガンジーは岩。

肉体改造6日目ベニコが「今日が峠明日は楽になるよ、最終段階いきマース。」うれしそうだ……悪魔め！！それはいきなり来た……全身が攣ってます、呼吸がしんどいとは……そして俺の部屋には最終日と知ってか順番待ち状態だった。

食虫植物につかまって、動けなくなった虫の様に、体力と気力を吸い取られていくただ耐えるだけだ。まさに虫の息だった。彼女達(あいつら)も明日には不思議な花を咲かせた様に美しくなり微笑んでいるだろ……すべての女が満足して帰って行った。ガンジーは壁。

ふと、俺の息子が気になって、大丈夫だろうか確認するため、ゆっくり首を起こし見た。

絶句……

それでも俺の息子は、いつでもかかって来い！と言わんばかりに、なぜか元気であった。息子は城。

流石マイ、サン。ネバーギブアップの心は受け継いだ。俺もあきらめないぜ。

その時ふと子猫が蛇を倒してる姿が思い浮かんだ、これが天啓か？いや、これを天啓でなければ、なんと呼べばいいのだろうか。

体が少しずつ楽になっていく、涙があふれそうだ。

人猫計画復活……「にゃ」って言葉を聞いて、熱いものを感じれば参考にしてよし。注意深く観察すること。危なく心が折れる所だったぜ。

１度抱かれるとしばらく満足なのか、体の変化で満足するのかわからないが、１週間で６０名を抱いたことになった。俺は船に移動しコレクションボックスから手帳を取り出し、

男のロマン計画シリーズＮＯ１、ハーレム計画に大きくバッテンを書き王様計画に変更した。

また側室候補に人獣は危険、ただし人猫は研究の価値あり。ドワーフ、研究の価値あり。と新しくページを作った。

体のほうはすこぶる調子がよく、身体能力がかなり上がってるみたいだ。

化け物にならなくてよかったと安心して、旅の準備が始まった……が

簡単に問題は解決した。

カバンに６箇所、召還陣を書きそこに必要な物を置けばいい事になった。

武器庫と食料庫、倉庫と金庫、通信庫となった、もう一つは秘密のコレクション置き場にした。

村人の数名がドラゴン先生と話しができる事になり村をまとめ問題は先生と相談するように決まった。

ドラゴンの巣を１部改造して、食料庫や金庫を作った、ここに秘密のコレクション置き場も作った。

不思議な水がでる場所は冷蔵庫の中のと同じ感じなので保存には、もってこいなのだ。

金庫も一番安全ということでそこに作った。

通信庫は村の中心の家に作り（シン様親衛隊がほとんど住んでる大広間俺の城になるのかな？）手紙を書いて送ったり、いつでも誰かがいる場所に作った。簡単な食事なら作ってくれるらしい。

今の村の状態だが２０人くらいが泊まっても十分な広さの家が一つあり（最初の家）そこから増築を繰り返し１２畳くらいの部屋を左右に６個作りコの字の様になった６人が一組で部屋で住んでる。

中庭は村人の集合場所となりそこでみんなで食事する。

この家を囲む様に夫婦の家を作っている。

ちなみに右奥は夢のマイホームであり左奥はドラゴン先生の巣がある。

夢のマイホームはサラ、ステラが住むことになり、増築してベット１０ほどある医療施設ができる予定だ。

今の状態では食事はまとまって作り（食事係りが作り）みんなで食べる。

それぞれ得意な分野を伸ばしてほしいので、ほとんど希望道理にみんなやってる。まぁ種まきや収穫時期、家を作る時などは全員でやってるのがきまりとした。

武器庫はいろいろな武器が戦場跡から持って帰ったのでそれが置いてあり、ゆっくり修理したり作ったりして置いておく、ドワーフ達が、

「家ができて落ち着いたら、俺たちが武器を作ってやるから」

って張り切っていた。

俺も武器を売って、村に必要な物を買って送るよと話し約束した。

同じように、薬作りの上手な者や、狩の得意な者、農業で作るから穀物を売ってくれと……頼もしい仲間たちだ。将来は麦や米などから酒を造りたいなと思うのだった。

後1週間事が早ければ俺はこのすばらしハーレムで一生過ごしてたのかもしれない。早まったか？と思ったがまぁ旅をして強く大きくなるのも人生だと思い、自分に言い聞かせた。よりすばらしい生活（科学）を手に入れる為いくのだ。

肉体改造されてなければ俺は親衛隊に男を搾り取られ死んでいたかもしれないのだ。

待っててくれサラ。

「おいシン、毒が抜けてすっきりしただろ」
クラオが話す、
「ああ、そうだな体が本当に軽くなった。今なら何でもできそうだ」
「それに俺たちは使えるぜ、なんせ3人で1つだから、三人あつまれば……最強のバカになれるものさ」
「バカもっとまじめに話しなさい」
「すまないベニコ」
「まぁ今はまだ成長中だが俺はお前の動きに微調整ができると思ってくれ、お前の体の動かし方の補佐を今してるんだ馴れたら今の倍まで動けるぞ多分、肉体改造するが」
げ……やっぱ魔物になるんですね
「そう脅かさないのクラオ、私はいまだと記憶よたとえば風景を一瞬で覚えたり音を覚えたり念じれば正確にだせるは、記憶の中だけどね、他にも魔力探知やいろいろ出来るみたいだ」
なんか、君たち使えるね前の世界で会いたかった……テスト１００点とかできそうだ。
この二人はだろだろやっと分かったか、ってうなずいてた気がした。
もしかして視力もかえられるのか？と思い、ちょうど遠くで水浴びしてる人を見つめる。

ズームされはっきりステラの姿が見えた。

「変体、そんなのに使わないで……ぷんぷん」

頭でベニコが叫んでる。

静かにステラの背後に近づく、クラオ！ナイス！。音を立てないで歩いている、すごい……すばやく胸をもみ走り去る、忍者のように動く俺すばらしい。ステラかなりでかいな、あの時は生贄だったから、ほとんど記憶に無いが……じっくり見て触ってみたいものだ。襲うときはまず裸になってアピールしてから襲うそんな規則を作らねば。

そして明日の準備をしっかりして夕食を食べに行く。

みんなと食事をして明日朝出発することを話す。

「俺は旅にでる、強くなって帰ってくる。皆もがんばってくれ」

お金はあるのか？と聞かれたのでここぞとばかりにドラゴン先生にもらった金貨を見せる。

唖然とする村人その後ダグラスが真剣な顔で話してきた。

「その金貨は数百年前の物ですごく価値があるがそんなの使えば、たちまちお前は捕まってありかを吐けと拷問をうけるだろう……それは使わないほうがいい得に今は」

そうなのか？？

うなずく村人そして　お金の価値を教わる簡単に　小銅貨　銅貨　鉄貨　銀貨　金貨　大金貨　白金　大白金の素材で使われ価値は約１０倍ずつ増える。

銅価が約１０円の価値らしい、ただ物々交換の代用なので価値は作った国や場所で結構変わるらしいが、精度もあるのだろう。

小銅貨　一ギル（円）
銅貨　十ギル（円）
鉄貨　百ギル（円）
銀貨　千ギル（円）
金貨　万ギル（円）
大金貨　十万ギル（円）
白金貨　百万ギル（円）
大白金貨　千万ギル（円）

こんな感じ、お金は村人が少しずつ持ってるのを出してくれた……ありがとう

３５万円集まった。大切に使おう。単価はギルです。（そのまま円で考えてください）

夜、俺はサラと少しはなし、やっぱ無理だ3年は待ってくれと頼んだ。サラは待っていますと、申し分けなさそうに話した。

「シン様、すいません」

「大丈夫だ、いい方法が思いついたら召還するよ」

「それまでに強くなってます、そしたら2人で旅ができますね。」

「俺もがんばって強くなっるよ」

では……お休み〜〜、疲れたなぁ〜〜と布団にもぐったが……！？

またもや全裸のステラが待機していた。

妖艶な瞳で側室は私ですよ、２番は私と言わんばかりに、じゅるり。

肉体改造された俺を思い知れ！！３ラウンドＫＯで俺は勝利した、俺なんか、かなり夜は強くなってるなと考え眠った。

朝早く起きて寝ぼけて甘えてくる、ステラも大切にするからサラを鍛えてやってくれと頼み、お別れのキスをして旅立った。

第7話　肉体改造（後書き）

よろしくお願いします。

第8話　村を出て

村を出てまっすぐ西に向かった。

１０日も行けば小さな村がありさらに１５日ほど西には自由商業都市があるらしい。

国の規律も緩やかで一人立ちする人は最初に、ここを目指すのみたいだ。

俺は久々にシロの背に乗って思い切り走らせた。

気持ちいい～～なんていいのだろう。

それに夜も気にしないでゆっくり寝れる。こいつら強いから安心だ。

さらにすごいことに、ベニコは魔力を探知できるらしく脳に直接刺激して円状のレーダーみたいなのを出してきた。

俺の記憶からこれが一番再現しやすいらしい、集中すればよくわかるが生物反応が円の中でピコピコ光ってる。

シロとクロの魔力が強すぎて見えにくい……まぁ～危険がきたら起こすと言ってたので今日は気にしない。

１日目はぶっ飛ばして走り翌朝はのんびり進んだ。

歩いて3日くらいの距離か、そろそろ危険かもな。

気持ちのいい草原に出たのだ、ま・さ・に・アフリカン……

まさに俺はここぞとばかりに服を脱ぎコレクションボックスから毛皮で作ったいかにもジャングルの王みたいな格好に着替えて

「ウホホ～～～」

雄たけびをあげながら草原を疾走する。男のロマンだ。

今回は棍棒でなく石槍だ。やはり、きもちいい。

するといかにもって泥の沼を見つけたので、思い切りダイビング。

「グハハハ、気持ちいい！！」

子供が田んぼで泥んこ大会などをして遊んでるのを見て一度はやって見たいと思ってたのだ。

まさにドロドロになり満足してそのまま走り出す。

「うほうほ　うほほ～～～」

我ながらひどいと思ったが今は一人だしいいか、うはははは、夢を一つ叶えた。

遊びつかれてゆっくり昼寝でもしようかと　丘に登って転がる、

遠くで、うほうほって聞こえる。

アミーゴ！！

目を凝縮してみるとクラゲが反応して望遠鏡のレンズのように動き遠くでも見える。

獣を狩ってる原始人がいる、おおこんなところにも仲間がいたのか……

あいつらは魔族か？とベニコに聞く。

あれはドラゴンの記憶では、かなり知能の低い人間ですね。原住民って所か……参戦しよう。

俺もドロドロの体でまさに同じだ……いくぜ！！

「うほほ～～～」

ばれないように先回りして、狩りをたすける。

「ウホウホ」

すぐに仲間に溶け込んだ。

ああ～～わかるよ、ご先祖さんこうやって生き延びてきたのですね。

血はつながらないけど、ブラザーと呼べる言葉はいらない。

「うほうほ」

とお互い喜び合う、

「シンは言葉がわかるのですか？」

ちっ舌打ちしながらベニコに話す。

「そんなの、ノリだノリ……翻訳はお前の仕事だろ、よく聞いて翻訳してくれ、クラオなら判るよなこんな気持ち？」

「変体で単細胞なのがよくわかった」

「なんだと～～くそ、クラゲに男の気持ちがわかるか～」

もう知らん気分を害しやがって。

そして獲得物をしばり、凱旋していくブラザーに俺もついていく。

その時

「うわぁぁ～～」

叫び声が響き獲得物の１つを大蛇が襲ってる。

「くそ～～俺たちの獲物を横取りか」

大蛇と目が合う、恐ろしい記憶がよみがえる。殺す、頭より体が先に動いた。

獲物を咥えている大蛇は動きが遅い、すばやくジャンプして大蛇の頭に石槍を刺しながら

「スパーク！！」

バリバリバリ

焦げる匂いがする。

それを見たブラザー達が一斉に襲い掛かる。

大蛇を倒した。

「うほほ～～」

ブラザーの一人が雄たけびをあげる。

「「「うほほ～」」」

強い絆ができた。俺は勇者の様に村に招待された。

原住民イメージ通りそのままの住処だった。１ｍくらいの高さで古い石垣や木の柵囲ってあり。

１００人くらいが住んでそうだ、まだそんなに魔物はいないのだろう。

村では宴会が始まりどうも村の長に俺が天敵の大蛇を倒した見たいな事を報告してた。

そしてなぜか若い長と村の権力を争う戦いになった。

「言葉はしゃべれるのか？」

「ああ」

「すまんが大蛇を倒した者が村の長になる決まり、俺と勝負」

「俺は長になる気……」

「村人に言葉は通じない！強い者が長だ手加減なしだ」

戦いが始まったが、ポコ！！一撃で俺は長を沈めた。

俺が長となり宴が始まろうとしてたので味見と言いながら（イメージね）ドラゴンの薬を溶かした水を入れた。

これで狩の傷も治るだろう。知能ＵＰしてくれる事を祈った。

村の長を起こし話す。この村で話せるやつは何人だ？

「私と3人女の方と長老夫婦です」

「なるほど、しゃべれないと不自由だな、後で話せるやつらを連れて来てくれ」

「女は好きなだけ選んでいい、最低1は連れて寝てくれないとこまる」

何度も断るが、新しい血統が無いと絶滅しそうだとか、村人ほとんど同じ顔だし、なるほどと思ったが出来そうにない。

俺は村人を見て回る……すげー人類の歴史が分かりやすそうだ。

すげ～紀元前の人間発見。心であの村人は紀元前と呼ぼう。犯人

は君だね君がこの村を退化させてたんだね。バシバシ叩く。

「うほ～～うほうほ（分かったか俺が１番力持ち）」

ムキムキってしてる。さすがだ。

実はゲラゲラ笑いそうたが、クラオが顔の筋肉を無表情にしてくれてる。

クラオとベニコはその手足を俺の体中に這わしてるらしく、それで神経などコントロールできるらしい。

ああ～～～、いた、原種だ原種……あれは縄文人だな。俺は縄文ガールの前に行って観察する。

これは筋肉の塊だなおっぱいも筋肉だろうな、強そうだ。すると縄文ガールが

「うほ、うほ～ん（私、いいわよ）」

「ぶほっぶぶ、ぶほっ（ちがう、全然ちがう）」

って答えてやった。ゴブリンより知能低いなこいつら。

無性に縄文ガールの進化が見たくなったのでドラゴンの薬をがつがつ食べてる飯に入れておいた。

適当に歩いてたら、強い魔力を発見したので、そこに行くと熟してるが現代人ぽいのを見つけた。たぶん話せる人だろうあとから、断ろう。顔は美人だが原始人の格好だし頭もぼさぼさなので、興味はない。

こいつだと元長に話すとやっぱり、話せる女性だった。

言葉の話せる人達で集まり、言葉を村人に教えるように説得した。俺はドラゴンの守ってるから長にはなれないと話すが信じてくれない。仕方なしにドラゴンの薬を長老夫婦と女に飲ませた。明日奇跡を起こしたら俺の約束を守れと。皮剥きが心配なので不思議な水とフェロモン魔法をかけた。

その夜、宴も終わって寝ようとすると、

「遅くなってすいません」

と話せる女性が静かに入ってきた。彼女の名はアンナ、綺麗に体を洗い、髪も束ね、化粧をしてあらわれた。目の前で挑発的なポーズを取る。

絶句……

ここまで見かけが変わるとは思わなかった。たっちまった。

手の導かれるまま、体を任せた。

大人だった……エロＬＶ１００くらいの人だった。

‘３‘

翌日

早朝村人を集める、長老夫婦を呼び顔を見る。ニヤリ、俺は怪しい呪文を唱えながらペロリと皮を剥ぐ。大歓声が起こる、すごい盛

り上がりだ。ついでに朝稽古をしようと思い。武器を持って、

「よし、朝の訓練をする、これから毎日する様に」

シーン……あ、話せないのだ……

紀元前が突然、うほぉぉと叫びだす。

「「「うほ、うほ」」」

ブラザーも声を合わせる。よしやるか、と思ったら、すっごい勢いで狩に走っていった。

あぅ……まぁいっか、

ふと熱い視線を感じる……やばい、縄文ガールが目を血ばらせてこっちを見てる、明らかに発情してる。

俺も紀元前を追ってダッシュで追いかけた。

アブね～～あれは危険だ。

どうもドラゴンの薬の効き目は　怪我＞若さ（２０台近く）＞願望なのかな。

サラの場合　軽い病気・ランクアップ２回、多分ランクアップしたかった。

村人　　病気・若返り・各種能力アップか。

ゴブリン　　怪我・能力ＵＰ（知能大・戦闘能力）、

長老夫婦　　若返り・？

紀元前　　軽い怪我・野生化？
縄文ガール　本能強化大か？何を望んでいた？やつは何も考えてなさそうだ、危険だな発情してたし。
アンナ　　もしかして……すごいエロになってるかも

しかし紀元前は何処に行ったんだろう、きょろきょろしてるとアンナがやってきた。見た目は１６歳くらいだ。絶句、制服着せれば女子校正でいける。肌は白く、黒髪、目も黒い　もちろん美女だ、スタイルもすばらしい。俺のスペシャルな水着を与えたいそんな体だった。

「本当だったのね。びっくりしたわ」

自分の体を見つめながら話すアンナ。

「私はこれでも有名な魔法使いなの、でもこんなのは初めて、若返るだけでなく魔力も大幅に上がったわ、シンの為ならなんでもするわ」

「ありがと、所でなんで、こんな所に住んでるの？」

「私は奴隷だったの、知ってる通り1年前の戦争で逃げ遅れた兵や奴隷の調査役、主はこの森を出る為に仲間を集めるのが私の仕事だった。今回はこの村の調査だったの、元長の偵察と勧誘、彼は冒険者の子供だったけどね」

「なるほど」

「シンが来た時は少し怪しいと思って警戒してたけど、すぐにバレタから覚悟したのよ」

アンナの話では、俺は正体不明の男だった。見た目もそうだが原住民とも怪しい会話してる、なのに言葉も話せる。魔力を見ても不思議な感じで捕らえきれない。暗殺も考えたが帝国の者ならシンを探しに兵がくるので逃げ場がなくなる。

アンナは、手を触れると相手の情報が分かるスキルがあるらしく、俺の情報を覗く為、夜に会いにいった、シンの行動と情報を見て殺すか考えようと思ったらしい、結果は最高に良かったは、情報も昨日の夜も……

それに見て、と左手を見せ呪文を唱える　腕に白い文字が浮かぶ

【所有者　シン】

ええ？？

「シンが、私の体を若返らせた時、前の奴隷魔法を書き換えたのよ、信じられないわ」

「そうなのか？」

「えっ知らずにやったの？」

「知らなかった」

「じゃぁ特別見せてあげるわ、奴隷カードオープン」

アンナの手に不思議な金属板が出てきた。彼女のスキルらしい。

アンナ　人間　女　１６　魔女

所有者　シン

制約
1・襲う時は裸になって自己ＰＲする事

あちゃ～～なんだこれ！？

「そんな制約を前言ったでしょ、本気で」

「たしかに」

「私も見て爆笑だったわ、殺すかもしれない相手になぜかＰＲしてしまうから」

「この制約って、自由に書き換えるの？」

「そうね～奴隷魔法を使える人なら消したり書いたりできるわ。だから奴隷と持ち主と奴隷魔法を使える人３人で行うからめったにしないわよ、奴隷について詳しく話すね」

アンナの話では、普通奴隷になったら、持ち主の命令には逆らえなくなる、それが奴隷魔法。犯罪者か奴隷として売られた人がなるの。奴隷魔法は普通の人では使えなく、国王や裁判官、奴隷商人など特殊な職業でないと使えない。制約は奴隷の安全を保護するように、主人は衣食住の義務や税金の支払いなど、国によっていろいろ付けられるそうである破れば奴隷は解放される。

奴隷が主人を殺したり危害をすればその奴隷も主人と同じく死んでしまうらしい。病気や事故で主人が死んだ場い１～２年後奴隷も不時の病気になり死ぬらしい。（サラ達がそう）主人が貴族などの

場合すぐ死ねば死んだことが分かるから時間がかかるらしくその間に後継者が奴隷を引き継ぐことになる。

遠くで奴隷を働かせたりする時、まじめに働かせる為にさまざまな制約がされる。

他にも魔法でなく首輪をつけて奴隷にするのもあるらしい。

「なるほど、俺が書き換えたので俺は自由に書きかえれるのか」

「そうよ、その調子じゃまだ分かってないわね」

と言って、奴隷カードの【所有者　シン】をタッチする。

シン　男性　２０歳　人間　国王

所有奴隷　２６５名

サラ

ステラ

ダイアン

ずらり２６５名の名前が

えええ国王??てか全員奴隷だったの??まさか……ドラゴンの薬ってそうなるのか?でもゴブリンたちはいないから魔物はならないのか。

「やっぱり、知らなかったのね、くすくす笑う」

アンナの話では、完全な自給自足の生活と、１００名以上の住民と支持９０％以上、国を守る戦闘力、があり、国王となる人の器が必要、すべてそろえ国王になると宣言

すればなれるらしい。器、意外は貴族などでも出来るが、器がないらしく王になった人はいないらしい。

器なんかないが……もしかしてドラゴン先生の記憶と人格か？最近凶暴になってる気がする。

ぽかんとしてると、さらに【国王】をタッチする。

ハーレム王国　国王　シン　妻　なし
人口　２６５名　民忠　１００％
文化ＬＶ１　農業ＬＶ２
商業ＬＶ１　特産なし
領地　ハーレム国　ＬＶ１　人口１６４
　うほうほ村　原住民　人口１０１
友好国　エリートゴブリン国

絶句……

「なんでハーレム王国なんだ！！」

「知らないわよ　くすくす　シンらしいわ、そんな事考えてたでしょう。国名は変えられないわよ」

ずぼし……しまった、まさかこんな名前になってるなんて。がっくりする俺。

「ガッカリしないの、国が作れるのはすごいことなのよ、国民すべて奴隷だから秘密にすればいいよ」

「なるほど、ばれなかったらいいのか。この国の事は秘密でその存在を国外で話してはいけない規則を作る」
など数個規則を作る。

確認してくれと頼むとアンナは、【妻】をタッチする

シン王　２０歳　妻　なし
側室１　サラ　　１０歳
側室２　ステラ　　１８歳
側室３　アンナ　　１６歳

なんだこれ！？

「あなたが手を出した女よ、まさか１０歳とかいるなんて……変体」

バチン、びんたされて、言い訳を話す俺、

「そっか、昨日は私も３７だったし、ごめんごめん」

「しかし、こんな事も出るのか、これでは手が……」
やばい殺気が……

「そうよ、シンが好意を持ってすれば記憶されるわよ、こんなのは、かなり高い地位しかないけどね、あなたの子供です。って突然人が来ても分かるようになってるの、だから女に手をだしたらバレバレだから気を付けるのよ、くすくす　しっかり相手してあげるから、女性も浮気したり無理やりされても記録されるから、他の人は手出ししないわ」

独身なのに棺桶に片足つこんていたのか、しかし他６０名のってなくてよかった〜〜

「そっか、よろしく頼む」

で奴隷カードのほうは

制約

１・襲う時は裸になって自己ＰＲする事

１・国の事はすべて秘密、個人情報も含み、国の存在を他人へ漏洩の禁止

１・国のためにまじめに仕事する事

１・毎日訓練して、身を守れるようになる事

「これで大丈夫かな？」

「最初の制約は国民って付けて方がいいわ、戦争とかになった時大変でしょ」

「なるほど、そうする」

制約

１・国民を襲う時は裸になって自己ＰＲする事

１・国の事はすべて秘密、個人情報も含み、国の存在を他人へ漏洩の禁止

１・国のためにまじめに仕事する事

１・毎日訓練して、身を守れるようになる事

ケンカになったときは面白いだろうな、

「シンだから、話すんだけど聞いてね」

アンナは１２歳の時このスキルを手に入れた、このスキル【情報閲覧】はある程度の情報を自由に見れるスキルで、触ればその人の個人情報から国の情報まで見れるらしい。１５歳になった時、占い師としてやっていたが、１６歳になった時、貴族にばれて、捕らえられて、奴隷としてそれから生きたらしい。ちなみに奴隷カードは持ち主しか出せずタッチしても変化しない。腕に出る文字は売られた場合は青　犯罪者は赤、自ら望んだ場合白だそうだ。青と赤は隠す事が出来ないが、白は持ち主が決めれるらしい普通は出ない。

アンナに触れると情報がバレルと恐れて、だれも近寄る人もなく、主人に夜は散々しこまれたらしい、牢で生かされ外に出る時は、触ると呪われる呪文をかけられた。スパイなど拷問してる部屋で相手の情報を見て話す。それが彼女の仕事だったらしい。

私は１６歳に戻りたかったの囚われる前の姿に何度も牢で祈ったは、力もほしかったこんなスキルでなく戦える魔法が、シンのおかげで、その夢がかなったのよ。

１年前の戦争の時連れてこられ、今、その貴族は隣の村をのっとって暮らしてるの、彼らは偶然見つけたムラムラ草を今育てて、その実を収穫してるわ、もうすぐ帝国に帰るはずなの、それまでになんとしても復讐したいのよ、シン手を貸して。

「そっか、そいつ殺すのか？」

「もちろん、捕まえて、ピーーしてピーー切って埋めてやるわ」

ガクガク、ブルブル、アンナも危険だ。

「アンナ、復讐は禁止する、そいつを殺す事もだ。それよりそのムラムラの実ってなんなんだ？」

「何でだめなの、あれは人でないのよ、奴隷も２００人はいるは、あいつは人を信じないの回りは全て奴隷なのよ、ガチガチ制約されて皆、生きてるのがつらいのよ」

「じゃ～やっぱだめだ。ま～作戦考えるから、安心しろ、それよりそのムラムラ……」

「作戦かぁ、はぁ～～。ムラムラ草の実は食べたら　ムラムラしてくるのよ、すごくＨな気分になって……何言わせとんじゃゴラァ～～」

言葉が怖い……

「うほ～～楽しそう、食べたことあるのか？」

「無理やり食べさされたの……そしたら我慢できなくなって……ゴラァ～」

「二人で食べて楽しもう、うんうん」

「一人で食べてサルになりなさい」

……しょぼーん、ところで

「その貴族ってこの村からどのくらいはなれてる？」

「歩いて半日かな？」

「なるほど、仲間は何人いるの？」

「全員で１０名です」

「じゃ～そろそろ、来る頃だな」

「ええ？なんで」

「アンナのスキル貴重なんだろ、どうなったか確かめにくるよ。そいつ、多分毎日奴隷カード見てそうだから、おかしいって気づいて兵送ってくるに違いない」

「それは、ありうるわ」

周りを眺めてるといかにもってやつが2人やってきた。

第8話　村を出て（後書き）

よろしくお願いします

第9話　うほうほ村とボチン村

怪しい2人組みが村の方に歩いてくる。

「あれ、その貴族の奴隷かな？」

「ええ間違いないは、下っ端よ」

様子みるか、行って見よう。

「アンナを何処にやった」

二人組みは怒鳴りながら暴れている。

「うきぃぃ～～」

逃げる村人達、すると縄文ガールが棍棒を持って襲いかかる、慌てて俺たちも駆け寄るが、

ポコ、ポコ、兵達は一瞬で倒された。強えーー縄文ガール、すげー。

兵2人を縛り、装備を剥ぎ取る。何だこれ？変な腕輪をしてる。

アイテムリングと言う腕輪で中に２０個（1個につきスタック１０）物が入れられるらしい。お金は別で、まとまって入る。結構高く貴重らしい、何で奴隷が持ってるの？ってきくとかなりお金持ちの貴族らしく側近は持ってるらしい。

奴隷達の主の名はボチン・ケラジミ、この戦いに側近５０名を連れてきてたがほとんど死んだらしい。

おおこれは便利だ、中身を見ると非常食や水お金、ナイフや簡単な調理道具がある、水は早速不思議な水と入れ替える、袋みたいな水筒で５Ｌくらい入る。

「この赤い物はなんだ？」

「それは回復のポーションです」

飲んでみたが、うまくなかった。怪我した時飲む物だと怒られた。空き瓶はリサイクルするので取っておくようにと。小さな試験管みたいなので、ドラゴンの薬７個入れた。

もう一人の装備も取ってアイテムリングをアンナに渡すと持っているって話すから、中身を金庫に入れ
使い方を説明した文と一緒に通信庫に送った。

武器庫にアイテムリングが無いか調べたら２０個ほどあった。こちらも中身を取り通信庫に送っておいた。作業の時物の移動など楽になるから共同で使うように書いておいた。

金庫は３００万ギルくらいになってた。

俺は２人の兵士を起こして、アイテムボックスに猪の肉などつめて、

「隣の村まで行って話してくる」

といい、二人をロープで引っ張って隣の村に出かけた。

テク、テク、テク

3時頃には隣の村についた。

「お～～い、この村の長はいないか～～話がしたい」

なかなか、でかい２００人はいそうだ。村の感じはうほうほ村に似ている。

しばらくすると、ボチンが仲間をつれて現れた。

「これはこれは、どう言ったご用件で」

「この者達が俺の村を襲ってきた、俺は戦争などしたくないから、話し合いに来たのだ」

「すいません勝手に村襲うとはすいません、このばか者」

バシバシと2人の兵を殴るボチン、

「お詫びに今日はご馳走しますので、泊まって帰られよ」

「そうか、ではそうしよう、あそうだ、猪を持ってきた料理して食べよう」

俺はアイテムボックスから猪を取り出す。

見ていた村の者が声をあげる、丸々太ったうまそうな猪である。

俺はコック2人と一緒にご飯を作る事にした、猪をばらして、やわらかい所は焼肉用にして、骨やスジなど硬い所は、野菜をたっぷり入れてスープにした。ちらりと村の原住民を見ると、叩かれた跡や傷だらけだったので、ドラゴンの薬を2個スープに溶かした。このドラゴンの薬、元々めちゃうまいドラゴンの肉から作ったので、栄養やうまみがたっぷり出るから最高のダシになる。味は最高にいい。

夜の宴が始まった。焼肉は貴族達が食べ、スープは原住民に配られた。原住民がスープのうまさに驚いて興奮している。どれどれと人が集まり皆に行き渡った用だ。貴族達もその姿に興味を持ったのか、スープを飲み、うまいとうなずいている。

「シン、気に入った。なかなかの腕だ、お前はコックにしてやるぞ、喜べ」

「だから俺は村の長で……」

「あんなサルどもほっておけ、それとも痛い目に会わないとわからないのか、これを見ろ」

朝狩に出かけた、元長達5人がボコボコにされて牢に入れられている。

「お前なんて事を……」

「すまない、長、やられてしまった」

「さて、シンこいつらから話は聞いている、ドラゴンの薬を全て渡してもらおうか」

「これが薬だ……しかし、副作用があるから飲む時気を付けろよ」
試験管に5個入った薬を渡す。
若返り意外に能力アップもしくは、野生化すると説明する。
「そうか、息子も強くなるかすばらしい」
「そうですね楽しみですは、おほほ」
貴族の妻が笑う、二人とも丸々太っている、顔立ちは美男美女だろうが、食生活か悪すぎるようだ。
「もしかしたら毒かも知れません、試してみましょう」
魔法使いぽい中年の女が話す。
「油断禁物じゃ」
こちらも魔法使いのじじいだ。
「あの元長に飲ましてみようかのぅ」
ボチンが薬を見ながら話す
「5等分にして与えてください、若返りすぎます」
俺は様子を見ながら話す。
よし、じいよ、5等分にして飲ませてみよ。
元長たちは薬を飲まされ、みるみる回復していく。すばらしい、貴族達はその効果を見て絶賛している。そこにアンナが、やってきた。

「シン様、大丈夫ですか？」

「ああ大丈夫だ、なぜ来た」

アンナの姿を見た貴族達は、最初分からず、少ししてアンナだと気が付く。

「すばらしい、本当に若返ってるではないか」

手に持った薬を飲み、妻や魔法使いに渡し皆薬を飲む。

「すばらしい魔力だ、力がわいてくる」

魔法使い達は自分の魔力に感動している。その時アンナが、叫ぶ。

「ボチン、頭が高いぞ。このお方は初代ハーレム王国、シン国王であるぞ！！」

……

……

……

爆笑が起こった。

アンナそれ、秘密だって、もう〜〜顔を真っ赤にして俺は立ち上がる。

「ボチン、ここは我が村になった。おとなしく降伏しろ、さもないとハーレムの呪いをかけるぞ、戦うなら重罪にする」

「さすがシン、ハーレムとは、グハハハ、わしと同じ考えだったか。お前らシンを捕らえろ」

２人の兵が俺を捕らえようと襲ってくるが、

突然服を脱ぎだしムキムキとＰＲする。俺の奴隷になったからだ、アンナは、それを確認して来たみたいだ。

「気持ち悪い、重罪、ボコ、重罪、ボコ」

一気に殴り倒す。腕には真っ赤な重罪犯罪者奴隷のマークが出る。どうやら犯罪が重いほど大きなマークが出るみたいだ。

魔法使いが魔法を唱えようとして服を脱ぎだす。うふーん、ヨボムキ、

「残念お腹、重罪、バコ、重罪、バコ、ボコ、バシ」

「なにをした。貴様」

丸々太ったボチン夫婦がナイフを構えこっちに向かって走り出す、突然、服を脱ごうとし、脱げずに転がって頭を強打し、のたうちまわりながらＰＲしてくる。

「流石ボチン、新プレイか？理解できん。重罪、バコバコバコ」

ボチン、妻も殴って捕らえた　もちろんボコボコだ。

「アンナ後は好きにしていいぞ、これは復讐でない、こいつらは主に反逆した犯罪者だボコボコの刑にしてよい、ドラゴンの薬を飲ん

だから普通じゃ死なないだろう」

他の奴隷達４人は腕のマークが消えてるのに気がつき驚き頭を下げる。

ボチンの家から宝物を没収しながら家を調べてると隠し通路を発見した。

奥には１６人の奴隷が捕まってた。傷はそれほどないが１１名が女性で明らかにムラムラしてる１０人の女性がいた。

話を聞くと戦場でドサクサにまぎれて捕まえていたらしい。帰国後奴隷として売って大儲けするつもりだったとか。

とりあえず残ってたスープを飲ましながら一人一人顔を見ながら助けに来たと話す。しかし、１０人のムラムラガールは目がやばく、肉体改造を思い出して話すのはやめた。

元長と奴隷兵４人に好きな人を選んで助けて大切にしろと命令した。

後はつかまってた男を助け女性を助けさせた。案の定男達はウハウハな夜をすごした。

俺の奴隷カードを見ると、かなり奴隷が増えていた。

シン　男性　２０歳　人間　国王
所有奴隷　７６５名
サラ
ステラ

ダイアン
ずらり７６５名の名前が

ええ５００名も増えてる、なんで？村人２００としても３００人多いぞ？？

アンナに聞くとボチンの奴隷を相続したとの事。参ったな～～帝国なんて行く気ないし。

するとアンナが、ボチンの装備を剥ぎ取りだした。俺も捕らえた部下の装備を全て取る。

「あったわ、これよ」

「なにそれ、イヤリング？」

小さな青い石のイヤリングにしか見えない。

「これは、遠くの人と話せる魔法道具なの、めちゃ高価なのよ　２つもあるわ　これでボチンの部下と話せるわ」

俺はその通信機？見たいな物を使って、遠くの奴隷に命令した、以下こんな感じである。

１つ目は屋敷の執事であった。ボチンは俺に全てを譲渡したので、屋敷や財産を売り払い、奴隷で無い人には１年分の給料を払って再就職の世話をし、全ての奴隷２００名と共に自由商業都市に引越ししてくる事。

詳しいやり取りはアンアに任せるので、その指示に従うように。

もう1つの通信機は隠密集団だった、こちらは今まで生きた場所が抜けにくい為ほとんどは、今まで通り暮らすこととなった、住みにくくなる人や、仕事がいやな人は執事と一緒に行動することとなる。

（ほとんどは、普通の仕事をしてるスパイになる）

こちらの管理はステラに任せた。話すと「任せろ、前もやていたと」やっぱ怖い。

ボチンの宝を倉庫に送ってると、アンナが不思議そうに見てるから話すと、私も呼べるんじゃないかと言い出す。理由は側室だから、王とつながりが深いと。ためしにやったら出来た。アンナは、これで離れても、夜はいつでも会えるねと喜んでいた。なんか心配だ。この魔法は往復切符みたいに、帰りは一人で帰れるらしい。不思議だ。

この夜は10組のウハウハな愛の声とアンナの6人への拷問が夜中まで響いた、殺すなって言ったから死なないだろうな、ドラゴンの薬も飲んでるし。

@3@

翌朝

朝一、ウハウハな夜をすごした男達は、彼女と結婚させてほしいと頼んで来た。彼女達もお願いしますと頭を下げる。

ちなみに、アンナの話では奴隷の結婚はほとんど、認められないみたいだ。子供が出来たらその子も奴隷になるらしく、子育てで母は働けず衣食住や税金も持ち主が払うからだ。

俺は関係ないのでもちろん認めた。彼らはこのボチン村でやっていくと決めたらしい。１０組の新婚が出来たので、３組は、うほうほ村で長老夫婦を助けてほしいと頼んだ。

そんな時、紀元前や縄文ガールが俺達を助けにきたのか現れた。彼、彼女の興奮ぶりは半端なかった。

やばいと思ったのですぐ生贄のボチンと妻を差し出した。彼ら重罪人は昨日ムラムラの実をもちろん食べさせてある。ボコボコになって若返ったボチン達はムラムラの実と元々スケベだったのか。そっちがやはりパワーアップしてるみたいだ。

重罪の奴隷魔法はそれだけで、主の命令は絶対と暴力や魔法は使えなくなる。

ボチン　人間　男　２０　色魔

所有者　シン

制約

１・原住民を愛することまた村から出てはいけない。

１・原住民以外と契ってはいけない。

１・求愛には必ず応え全力でその愛に応える事。

１・原住民に言葉を教えること、又その時常にいとしき恋人を口説く様に丁寧に行うこと。

１・手が空いてる時も恋人を口説く様にやさしく原住民を助ける事。

こんな制約にしたから、紀元前や縄文ガールの前に出すと事は早かった。

「うほ、ジギジギうほ～ん、うほうほ（こいつ　好きにしていいよ）」

「うほ、うほ～ん（ホントに、やった～）」

求愛中の声がひどかったが、まぁいいだろう。

ちなみに重罪の魔法使い2人は、うほうほ村に行ってもらった。

重罪人達のテクニックがすごいのか、原住民達での求愛は無くなり、新しい血が入るみたいだ。

ボチン、子宝たくさん恵まれるといいね、ちなみに重罪人達は若返ると流石貴族と思う顔だった。

ボチンの村を元長と6組の新婚に任せ、うほうほ村は長老夫婦と3組の新婚に村を任せた。

ちなみに毎日ムラムラの実を重罪人達に与えるように言ってある。

ボチン家の秘密部屋にいたもう一人はエルフの女だったが、ほとんど感情がないので、俺が面倒を見る事になった。。ドラゴンの薬を飲ますと少し話すようになり俺にしかなつかなかったからだ。危険な旅だと言っても「付いていく」と話すので、ためしに戦うと負けてしまった。

ボチンに聞くと戦場跡近くに一人で立ってたらしいので捕まえたが、感情がないので売るつもりだったと、ボチンの話では彼女は処女なので手は出してないと、ムラムラの実を食べさせても効果なかったらしい、処女は高く売れるし、人形を抱くほど俺は馬鹿でない

と言ってた。
ボチンの秘密部屋に召還陣を書き必要な物があれば手紙を書く様に言って、明日出発する事となった。

十数年後ネオ原人たる頭も良く脅威的な怪力の部族が出来てこの辺一帯を支配する事になる。

その夜、アンナはすっきりした顔と嫉妬で複雑だった。

「なんでエルフを連れていくのよ！！」

「美しいから、あと強いし、あぁ痛い～～」

アンナが、足をつめる

「私も行きますからね。離しません」

「そうだな、しばらく一緒に行くか、ボチン殺すよりは良かっただろ」

「そうね殺してたら、３００人が死んでたしね、ボチンの周りに跡継ぎがいればあっさり、殺せたのに」

「まぁ～後は２００人の奴隷と金で好きな事、すればいいよ。貴族の暮らしができるかもよ。全て任したから」

「そんな事いって私を追い出してエルフとイチャイチャするんでしょ」

「ばれた、感情戻ったら楽しませてもらうよ」

「も～、今日は楽しませてね　テクニックでメロメロにしますから」

「もちろん」

長い夜が始まった。

第9話　うほうほ村とボチン村（後書き）

よろしくお願いします

第１０話　リスラト村

俺達は2日かけて、次の村を目指す事にした。

ボチン村から、３時間ほど歩き人気の無い所でシロとクロを召還した。

アンナとエルフ、名はクリスティーナ、クリスと呼ぶ事にした。アンナのスキルでも情報は名前しか分からなかった。魔力が強いと分からないらしい。

彼女達は始め驚き怖がってたが、襲われないと分かると、クロとシロにすぐになついた。

二人の背中に乗って2日かけて、次の村に着いた。村が分からず行き過ぎたのが失敗のはじまりだった。

１０日くらい西に行けば村がある、だけでは分かりにくかったのだ。

２日走り、そろそろだと探し回ってやっと街道を見つけ、行き過ぎたと気が付いた。

次の日、離れてた場所でクロ達から降りて街道まで行き、そこから歩いて村に向かう。

「服装は綺麗にしなさいよ、見た目が大切だから」

アンナの話す通り新しい服に着替えている。俺の村で作った手作

りの服だ。

「OK、じゃぁ行こう」

村の入り口に門兵がいるので話しかける。

「こんちは」

「リスラト村ようこそ、身分証明カードを見せてください」

「身分証明を持ってないのですが」

「無くされたと、では自由商業都市に行って再発行してきてください」

「ここではできないのか？」

「出来ますが、あなた達は怪しすぎます」

門兵の話では、1年前の戦争で脱獄兵が大量に村に来たらしい。最初は全て受け入れていたが、脱走兵を捕らえる、賞金稼ぎや盗賊達、うわさを聞いた犯罪者達が新しい身分証明をもらう為に集まるようになり、怪しい者は、自由商業都市に行く事になったらしい。

あなた達は東の森から来たと話すが西から来たのは見ていたし、服装などとても綺麗だ冒険者に見えない、それにエルフを連れている。エルフはとても高く、最高級奴隷として一部の貴族や神官などでしか持っていないそうだ、それに奴隷でない。良い貴族のぼっちゃんだろうが、君達の話はとても信じられない。あきらめて帰ってくれと。

食料など無いと頼み込み、２時間ほど兵士に見張られながら買い物をして、村の外に連れ出された。

「おにーちゃん達はやっぱり肉の買い付けか？この村は肉が有名だからな」

見張り役の兵が話す。

「俺達は冒険家ですよ」

「そっかそっか、おすすめの店はあそこで、ソースはこの店がうまい」

何を勘違いしたのか肉屋や調味料など店を紹介してくれる、多分貴族などの使いが買いに来るのだろう。

買う気は無かったが肉屋の肉を見ると、めちゃ美味そうな霜降り肉を見つけたので買い占めた。

この見張り役おすすめソースなども多めに買った。兵士達はやっぱりなと満足そうだ。

「最近レッドオークがこの街の近くで見たと報告がある。見た目だけでもちゃんとした装備にしろ、襲われにくい」

俺達の装備を見て、素人と思ったらしい、俺もそう思う。周りを見ると村の中は騒々しく、傭兵や冒険家などが目に着く、俺達とはまったく違う雰囲気だ。

俺達は兵士や店のおすすめの防具や武器を適当に買った。まとも

のな装備が無かったからだ。拾った装備は革などは腐って使えないし、重装備は重くて無理だった、武器もさびた所があり不安がある。

武器屋の親父さんに剣を見せたら、質は良いが手入れがなってない、これでは普通の武器より劣ると、１週間で直してやると言ってたが時間がないので、同じ型で良質の武器に多めの修理代を払って交換してもらった。

ゆっくり選びたかったが時間がなかったのであきらめた。

そんな事で、来た道をトボトボ戻り、村が見えなくなると俺達はシロとクロに乗って森へ向かった。

歩いて3日の距離、クロとシロに乗って1日分ほど引き返した。

なんで自由商業都市に行かないのかと言うと、そっちのほうが厳しいチェックがあるからだ。

再発行なら簡単だろうが、身元不明となればとことん追求されるに違いない。犯罪者や盗賊ギルドのメンバーでないかとか、国の事もバレルかも知れない、まぁ目立つのでやめにした。

で、3日間冒険家らしい格好で森を歩いて村に行く事にした。適度な汚れと魔物の素材を持っていれば、納得するだろうと。

クリスには１０万ギルを渡して青の奴隷になってもらった。奴隷とか気にしてないみたいだった。

3人は動きやすい装備に変えて武器を装備し歩いてもう一度村を目指す。

面倒なので戦いはクロとシロに任せている。クロ達もうれしいのか、生き生きと魔物を刈っていく。

左右から威嚇しながら魔物を追い込み殲滅する。魔物達は威嚇の雄叫びを聞くと逃げ出すからどんどん範囲を広げ集めて殺す。

俺達は死体から使える牙や皮、魔石なるものを広いながら歩く、生きてる奴もいるがとどめを刺しながら進む。　半日もしたら飽きてきた。

「つまらないな～アンナ魔法使ってみて」

「疲れるからいやなんだけど、１回だけよ」

ファイア・アロー！！

ドカーン

「すごい、俺も練習しよう、あっやばい火事になる」

ウオーターボール！！

１０回くらい唱えて消化する、パシュ……消えた。

ファイア・アローは火事になりそうなので、ファイア・ナイフなる魔法を作った。

イメージは炎の投げナイフだ、これなら素早く攻撃できるし火事にならない。

同じ感じにアイス・ナイフ、サンダー・ナイフも作った。

練習しながら進む。

「大体綺麗な服だから失敗なんだよ、俺の作ったスペシャルビキニなら問題なかったはずだよ」

「あんなの誰が着るかボケ！！」

分かってないな～、ぶつぶつ言いながら歩く、そんな時アンナが何か見つけたみたいだ、興奮した声で呼んでいる。

「シンこれ見て、キヌスパイダーよ。すごい初めて見た」

５０ｃｍくらいのクモを見てアンナがうれしそうに話す。

このキヌスパイダーは絹の様な糸を吐くらしい。茶色い体に黒い模様が付いている。気持ち悪い。

クモの巣にかかった獲物を絹糸でぐるぐる巻きにして食べるらしい、巣の下には繭みたいなのが落ちている。

「へ～これで絹ができるのか」

「そうよ、クモの絹は最高級品なのよ、王族や貴族の一部しか着てないわ、この繭も高く売れるのよ」

関心しながら繭を回収する。ためしに肉をちぎって巣に引っ掛けるとクモはうまそうに肉に飛びつき絹糸でぐるぐる巻きにして食べ

だした。

満腹満腹って感じだったが、気持ち悪いので思いっきりデコピンを食らわせてやった。

茶色い煙を出しながら吹き飛ぶ、キヌスパイダー。

「シンなんてことするの！！」

「気持ち悪いもん」

「あぁぁ〜〜ホント馬鹿ね」

アンナの話ではキヌスパイダーは、商売の神様みたいな魔物らしい。

まず個体数が少ないらしく見ただけでもラッキーな魔物で、絹糸を出すから育てようとする人もいたが、どんな物にでも擬態でき、動きも素早いから捕まえるのは難しく、捕まえてもすぐ逃げるか死ぬらしい。

打撃や魔法などのダメージを無効化するので殺す事は、ほとんど無理だが、人や生き物に害を与える事も無いみたいだ。

どこにでも生息するらしく、街中にも住み、気に入った食べ物がある家や神様など祭っている場所に、よく住み着き、お供え物などを食べて絹糸を置いて行くらしい。

キヌスパイダーを見たって噂が出ると、皆自慢の手料理を作り、少しだけお皿などに入れて置いておくらしい。次の日がっかりする

のだが、美味い食事が食べられるので人気がある。クモの繭でもあれば大騒ぎだそうだ。

気に入った家などには何年も住み着き災害の時などは助けてもらったと言う話は昔から山ほどあるらしい。

普通は草や石などいろいろな物に擬態してるのでクモの姿で見るのは珍しく、普通３０ｃｍほどらしいが今日のは、大物らしい。

「せっかく珍しい魔物に会えたのに、なんて事するの」

とアンナは、カンカンだ。

しかしこのキヌスパイダーは怒ったのか、

カサ、カサ、カサ、ピョーン、ぴたり。

俺の頭に乗ってきた、うわーと叫びながら、頭に乗ったクモを投げ捨てるが、何度も乗ってくる。

「なんだ、このクモは気持ち悪い、また頭にきた、こうしてやる」

やめなさいってアンナ声を無視して、クモの足を捕まえて棒切れでパンパン叩いてやった。

「これでもか、食らえ」

天気の良い日に干した座布団を布団タタキでたたいた様にボフボフとホコリが舞う。

茶色かったクモの体の色は絹の様な真っ白になり綺麗なクモにな

った。

「ギィ～～」

喜んでるのか、このドＭクモめ！！、ぽいっとなげ捨てるが、

カサ、カサ、カサ、ピョーン、ぴたり。

頭の上に飛び乗る。

「なんで俺はいつもこうなんだ！！、普通頭の上は、かわいい妖精や子犬とかが乗るもんだろ、それじゃなくても、目にクラゲもすんでいるに」

頭に乗ったクモをばしばし叩きながら、叫ぶ。ヘルメットをかぶった感じだ、ぽこぽこ音がする。

「えええ～～シンって目にクラゲ飼ってるの？？」

不思議そうに俺の目を覗き込むアンナ。

両目のクラゲがよろしく、って感じに上下に動く感じがする。

「うわ～！、挨拶された、すごい」

大はしゃぎのアンナ、クリスは不思議な生き物の様に俺を見てる。

「俺は人間だからな！！」

とりあえず言っておく。

クモはどうやっても、頭から離れないので、あきらめた。ちなみにめちゃ軽くて重さは感じない。

そろそろ昼だし飯にするか、と昼飯を作り出す。

もちろん霜降り肉のステーキだ。

昼飯を食べようとすると、頭の上から、タラーリとよだれの様に絹糸を垂らすクモ。

「食うか？」

「ギィー」

少し小さく肉を切ると、シュルシュルっと絹糸を出して肉を捕まえるクモ。カメレオンみたいだ。

しばらくすると、ポイっと絹糸の束を投げ出す。

「俺も飯食ってるんだ。もっと上品に落とせ」

ポコポコ、クモを殴るがクモは、とてもうれしそうに、ギィ～ギィ～と鳴く。

肉は最高に美味かった。

「これじゃ～村にも入れなくなるな、帽子とかになれないのか？」

と、悩んでると分かったのか、何かに擬態した感じだ。

バックから割れた鏡を取り出して、顔を見るとシルクのバンダナだった。色は白に黒の刺繍が付いているクモの背中の模様と同じだった。

ちょっとカッコよかったから満足した。さわり心地もいい。

「いいな～いいな～」

アンナは、うらやましそうにしながらバンダナをナデナデするので、アンナの頭にバンダナを乗っけると、ピョーンと飛んで俺の頭に戻ってきた。

どうやら、俺の頭の上に居座るつもりだ。

「アンナ、今度キヌスパイダーを見つけたら、棒切れでポコポコ殴ってやれ、うれしいみたいだ」

「わかった、そうするわ」

目がギラギラしている、叩き殺しそうだ。

それから、キヌスパイダーを探しながら村に向かう事になった。

クモを頭に乗っけるのがそんなにいいのかと不思議だったが、又怒られそうなので、やめておいた。

しばらく進むとクモがキーキーと鳴きだす。危険信号か？

『ベニコ、何かいるか？』

『2時の方向から何か5匹こちらに向かってます。気をつけてください』

俺は敵が来るかも知れないと話し、警戒して待ち受ける。

レッドオークだった。こちらに気が付いて襲ってくる。

アンナがファイアアローを打つが、ダメージはそんなに出てない。

「火の耐性があるのか、クリスいくぞ！！」

こくりとうなずき、走り出すクリスと俺、敵の矢を避け走りながらアイス・ナイフ！！

左手に氷のナイフが3本出てくる、さっと手を振ると狙った3匹の手に刺さる。

これは俺とクラオとベニコの3人でそれぞれ魔法を同時に使って狙うから出きる芸当だ。

武器を落としたレッドオークに切りかかりあっと言う間に敵を倒した。

全てのレッドオークを倒して振り返ると、アンナが倒れている。

「大丈夫か、アンナ」

手に何か刺さっている。素早く抜き取る、毒でないかアンナを調べると。

「痺れ・薬・が・塗・っ・て・あっ・たみ・たい・だわ、油・断・し・た・わ」

どうやら大丈夫見たいだ、俺は素早く革の防具を脱がしスペシャルビキニに着替えさせた。

これは、体が痺れると呼吸が難しく酷く息苦しいからだ。痺れ草で経験済みだ。

カバンから毒消しポーションを取り出し、口移しでゆっくり飲ませる。

後は回復の魔法を唱えながら薬が効くのを待つ、１５分後には動ける様になった。

「毒でなくて良かった、どうしてすぐにポーションを飲まなかった？」

「吹き矢だったので、気が付かなかったのよ、痛みもほとんど無かったし。弓矢なら避けたり刺さってもすぐ対応するわ」

「吹き矢とは、こいつらも考えたな、奇襲されたら危なかった」

「ほんとそうね、この辺りの敵は弱いと思って油断したわ、この豚ども私を捕まえて犯そうとしたのね許さない」

レッドオークの死体を蹴飛ばしながら文句を言ってる。すると、俺のニタニタしながら体を見る視線に気がつき、変体と言って殴

り、さっさと革の装備に着替えた。

しかし、着心地がよかったのか、満足そうに自分のアイテムリングにビキニを入れてたのを俺は見逃さなかった。

今度は絹の下着でもつくるかと考えた。

アンナはカンカンに怒って、レッドオーク狩りをすると言い出した。

村を襲うだろうし手柄になるかと思い俺も賛成して、レッドオーク狩りが始まった。

レッドオークはオーク族の中でも強く頭も良い部族で、好戦的らしい。

この辺りにいない魔物らしく最近住み着いたのかもしれない。

村人を襲って女を犯したり食料を奪うらしく、見かけたら討伐隊が出るらしい。

それでリスラト村は騒がしかったのかと納得した。

話ではのどかな村で、兵達も見張り台から遠くをぼーっと見てるだけの、静かな村だど聞いていたからだ。

夕飯を食べて明日は本格的にレッドオークの棲みかを探す事にした。

ちなみにキヌスパイダーはギイと名づけた。

ギイは、わずか半日で盗み食いを覚え、俺の晩飯のステーキをこっそり盗んでは食べていたが繭を落とすのでバレばれだった。

ムカっとしたが、絹のパンツ絹のパンツと思いあまり叱らずに繭を回収した。

次の朝、クロとシロは張り切って狩に出かけた、もちろんレッドオーク狩りである。

他の魔物を追いながら探してるのか、雄叫びが遠くから聞こえる。

俺達も警戒しながら進む。

その日、レッドオークは見つからず夕飯になった。

夕飯の時、ギイは繭を溜め込む技を覚え、食後に繭はどこ？って手を出すと大量の繭が出てきた。

森を歩いて3日目の朝レッドオークの棲家が見つかったみたいだ。

シロとクロの雄叫びが同じ場所からする。俺達もその場所に向かった。

うほうほ村と同じような原始的な村がありレッドオークは全滅していた。

逃げたレッドオークを追って行ったのか、クロとシロの姿は無い。

遠くから「助けてくれ～～」と声がするので行って見た。

すると普通ぽいオークが牢屋にたくさんいるではないか??

ベニコにドラゴンの知識で調べてもらう。

『この魔物はイエローオークですね、オーク族では一番弱いとなってます。性格は穏やかで真面目、食欲旺盛ですね、あ、詳しい記憶がありました報告します』

ドラゴンの記憶では昔はイエローオークの作る料理は超一流に美味いがコックの方がもっと美味いと。

味を覚えたドラゴンは２００年前に食べまくって、ついに絶滅危惧Ⅰ類になったとのこと。

詳細は味の頂点を極めたイエローオークが傲慢になり『味の分からぬドラゴンに食わす飯はない』と当時のイエローオーク・専用レストラン『ビバ・ドン・ガバチョ』のコック長が店からドラゴンをたたき出しケンカになって、怒ったドラゴンが食べた事が原因です。

ドラゴンがイエローオークを盛んに食べだしたのをきっかけに、他の美食家の魔物達がどんな味か気になって食べた所、非常に美味しく当時、闇で１０年に一度出版される【幻の食材全書】の第１位となり評価は幻の１０星過去最高の評価を得ました。

それから大量に虐殺が行われたらしいです。

家畜系オークとして秘密に飼育され美食家達と闇取引が今でも盛に行われてるらしいが、当時の味ではないと１５０年前評価では５星です。

これは２００年前のイエローオークが自分で味を求め様々な料理を大量に食事して栄養のバランス非常に良かったのに対し、ただ肥らす家畜系オークとの違いではないかと美食家達の研究で発表されてます。

又１００年前の雑誌には、失われたイエローオーク料理１００選などの特集が盛んに報じられ、食文化がかなり下がったようです。今でも当時の食文化の半分の味もないと報じられています。

犯人は先生かよ～～

「君達、もしかして家畜系オークさんです？」

「あああ、すいません、そうですが、食べないで下さい、お願いします」

泣き出すオーク達……

そこにクリスが歩いてきた。

「ああ～～エルフ様だ、ご無事でしたか！？」

皆、正座して頭を下げるオーク達。

いったいなにがあった？？

第１０話　リスラト村（後書き）

よろしくお願いします

第１１話　ギルド登録

エルフを見て土下座するオーク達、しかし反応がないので、がっくり肩を落とす。

「やはり、感情がないのですか」

リーダー的オークが話す。

「何か知っているのか？」

「少し長くなりますが話しましょう」

私達イエローオークは毎日平和に食っては寝、食っては寝と平和な生活を送ってました。

１年前、帝国はドラゴンの巣に攻めていきました。ちょうどレッドオークの村が帝国の通り道にあり村は焼き払われました。傷ついたレッドオークは森をさまよい。私達の村にたどり着いたのです。

私達は暖かく村に迎えいれ、看病し共に仲良くくらしてました。

しかし、ドラゴンの戦いに敗れた帝国の兵がこの森に大量に流れてきました。

レッドオーク達は恩を返すと襲ってくる兵達と戦い守ってくれました。

私達は『俺達弱いし、絶滅保護で守られてるからガンバって』と相変わらず、食っては寝食っては寝と暮らしてました。

ある日、レッドオーク達が『バラバラに動いてゴロゴロするのは守りきれない』と反乱を起こし自由気ままにやってた私達を牢獄に押し込めたのです。

放牧時間が決められ適度な運動を強制されました。そんなある日、エルフ様が来たのです。

エルフ様は戦場跡の邪念を払うために遠くから来たのですが近くに着たから様子を見に足を運んだとか。

レッドオークと話し規則はゆるくなり、お供として私達とレッドオーク達も食料など運ぶ為に動向しました。

戦場跡で死者の魂を浄化する儀式は3日3晩行われるはずでしたが、その途中うちの若いイエローオークが、供え物を食べてしまって……死者の魂は激怒し回りの人に取り付いたのです。

私達は逃げました。逃げる途中にあのエルフ様が最後の力で死者の魂を自分の中に取り込んでったのです。

後からレッドオークの長が何とか帰って着ましたが、皆魂を持っていかれったと。ほとんどは同士打ちで死んだからあそこには二度と近寄ってはいけないと言い残し、息絶えました。

それから残されたレッドオークの若い者たちは私たちを閉じ込めて、周りの危険な魔物を狩りすごく厳しくなったのです。

……お前らやっぱダメダメですね。

牢獄から、オーク達を出し臭いから体と口を洗えとバチバチ、鞭で殴りながらたたき出す。

そして、汚い村を徹底的に掃除させる。もちろん、バチバチ調教する。

昼近くなったので、霜降り肉をジャンジャン焼いて昼ごはんになった。

うまーって声が響く、

「ばか者、これはお前達だ」

「「「ええ～～～」」」

「毎日腹いっぱい食べてゴロゴロ寝てたら、霜降り肉になる」

「「「そうなんですか」」」

「その肉うまいだろ、他の魔物達もうまいと知ってるから、お前らを食べたくなるのだ」

「「「すいません」」」

「家畜系とは、畜産のプロと思ってたが、みずから家畜になるとは、一流コックの名が泣くわ！！」

「「「私たちの祖先は、一流コックって伝説は本当だったのですか？」」」

「本当だよ、厨房は戦場だ、料理って戦いを制して、世界一の名をほしいままにしていた。戦えば強く食材を探し世界中を冒険して、料理すれば最高の味を引き出し、フライパン片手にドラゴンと戦った聞くが」

「「「伝説は本当だったんだ！！」」」

「そうだ、最高の料理を作るイエローオークを招待する為、様々なお土産を用意して美食家達は待ったてたと聞く、だがもう無いと分かった、これをやろう」

俺はボチン夫婦から奪った趣味の悪い服を大量に取り出した。

「「「これは、すばらしい服だ、サイズもぴったり、いいのですか？」」」

「ああ、ある貴族からもらったものだ、もう必要ない」

「「「俺たち一からやり直します」」」

「なら、体を鍛えろ、畑を作り、プロの畜産家になれ」

「「「わかりました」」」

そんな時若いイエローオーク達が食料などをもって村に帰ってきた。

「これを受け取りください」

「どうしたんだ、これは」

正直に話します。人間達がレッドオーク狩りと言いって森の近くに集まっていたのですが、レッドオーク達も森に陣を築き対戦準備をしていたのです。私達は荷物運びや工兵として陣に柵や堀を作っていました。

3日間にらみ合いが続いていましたが、今朝突然、森から大量の魔物が出てきて人間達の陣を襲い、そのまま村に向かって行きました。

レッドオーク達が唖然としていると、村から逃げて来たレッドオーク達がきて、森の奥にいた人間を襲ったら、とんでもない魔物が出てきて森の魔物達を襲ってると。

レッドオーク達は素早く荷物をまとめ、私達に敵陣から奪った食料を持たせ、お供えしろと言って、北の森へ逃げていきました。

「なるほど、君たちは生贄ですか」

ビックっと震える若いオーク達

「なんでもしますから、お助けください」

「食べたりはしないから安心しろ、人間達はどうなった？」

「逃げ出したようです。村はどうかわかりませんが」

「村はリスラト村か？」

「そうです」

行ってくる村人が心配だ。
俺たちはクロとシロも乗って村の近くに行き歩いて村に向かった。
村は廃墟となっていた……
俺とアンナとクリスは　生きてる人がいないか探したが見当たらなかった。争った後がないのでどうやら、うまく逃げたみたいだ。
「だれもいないね、うまく逃げたのかな」
「そう見たいね、まさかこんな事になってるとはね」
「さて、どうしようか？」
「そんなの、決まってるは略奪よ」
目を輝かせて話すアンナ
「まずくない？」
「ほって置いてもそのうち、盗賊とかが来て盗むわよ、大丈夫だって」
結局三人は金目の物や村に必要な物を見つけては送る作業をはじめた。
武器や服などから、布団やベット、家具、木材、種や食料、調理道具、専門店の物をかった端から送る。

夕方、イエローオークたちも着て略奪に加わった。彼らは食料品や調理用具、武器やなど装備して、俺たちも一人前の装備ができたと喜んでた。

夜遅くに皆で晩飯を食べることにした。霜降り肉のステーキ、ソースにドラゴンの薬を少しまぜた料理をご馳走した。

夕飯を食べてると、オークがガクガク震えながら帽子を指差す

「今、帽子が飯を食べた、お化けでたぁー」

「あ、これキヌスパイダーだよ」

「あの伝説の美食クモを、頭にかってるんですか？」

「そうだよ、お前らも見つけたら自慢料理食べさせるといい、うまくいったら頭で飼えるよ」

本気でそう信じたのか、彼らは絶対飼うぞと目を輝かせていた。

オーク達に略奪が危険な事を話し、人間が襲ってくるかもしれないと言い聞かせ、今回は誰もいないからよかったが、二度としないように注意した。村をもっと森の奥にしたほうが安全だと話し、ボチン村の事も話して見学に行けと言っておいた。訓練してもらえるだろう。

次の日朝、オーク達は大量の荷物を持て村に帰る事になったが、あまりに多くて持てない事に気が付いた。

馬でもいれは運べるのにと探していたら、ふと、肉の産地だから

牛とかいるかもと思い探したらいっぱいた、放牧中だったのでほのままシロとクロに追わせて村につれてきた。

牛に荷物を載せてオーク達は一人一匹牛を引きながら森に帰っていった。

「元気でな～～」

「ありがとう、シン様、体を鍛えてがんばります」

どうせサボるだろうと思ったが口にはしなかった。

あまった牛などを村に送って、昼過ぎ、ギルドらしき建物に向かった。

「よし、ここがギルドか登録しよっと、アンナやり方わかる？」

「分からないわよ、今、説明書探してるからまって、その水晶を使うんだけどわかんない」

言われた水晶に手を置くと光って文字が浮かび上がる。

シン　男性　２０歳　人間　無職

あれ、王様でない。

アンナに聞くと普通、王様ってでるはずと話す。魔力で情報がわかるらしい。

もしかしてと思い、クラオとベニコに手に魔力を行かないように

してと頼んでもう一度、水晶に魔力をこめる。

シン　男性　２０歳　人間　国王

おお変わった、これはいける3人分偽造できるな。

俺自体は王様だから、俺とクラオ、俺とベニコ、それと三人の魔力で登録できることに気が付いた。

ニコニコしてると声が聞こえてきた。

「おお、これはこれは先客がいましたか」

振り返ると怪しい男たち２０人くらいに、囲まれてた。

「アンナ、クリス気をつけろ」

「「えええ～」」

囲まれてるのに気がつき驚く2人

「大丈夫ですよ、私達は同業者に手はだしませんから」

リーダーらしき男が話す。

「同業者??」

「なるほど、君たちは訳ありで、ここにいるんですね、お話しましょう」

見てのと通り私達は盗賊です。私はスタイルフリー盗賊ギルドのマスターですよ、今回新しく入ったメンバーに偽造カードを作りに

きたんです、あなた達と同じようにね。

ご存知のように犯罪や殺人で名前がばれると、盗賊や犯罪者として身分証明カードは書き換えられるのです。そんな人たちをクリーニングするのですよ。大金を払うか、うちのギルドに入ってもらってね。

あなたも盗賊ギルドに仮登録しませんか、仮登録すれば、私たちが面倒な仕事をしますよ。仕事ならきちんとしますから。どうやら貴族と間違えてるみたいだ。

断れば襲ってくると判断して、仮登録をすることにした、俺とベニコの魔力で……

「お～すばらしい、すでにクリーンな状態ですね、無職ってのがいけなかったのかな？」

「ええ、今物騒ですので、冒険者ギルドに入ろうと思って」

「なるほど、仕事ちゃんとくださいね、期待してますよ、シンぼっちゃん」

話しを聞きながらギルド登録を部下にしてもらった。

盗賊ギルドは仮登録すると、盗賊ギルドにその情報が入るが身分証明カードに変化は出ないので、クライアントが登録するらしい。盗賊ギルドはその情報が共有できるので一度登録すれば、他のギルドなども情報を共有できるらしい。

本登録すれば身分証明カードが書き換えられるので特殊な魔石で

出来たギルドカードに書き込む、すると魔力が少し変化して、新しく身分証明カードが作れるのだ。この特殊なギルドカードは体内の魔力と融合するので見せる事はできないが、アンナのスキルみたいに自分で取り出して確認ができる。

ただ死んだときは特殊なギルドカードも出るので賞金首の判断にらるらしい。高額な賞金首かお金があるかでないと偽造カードは作らないらしい。盗賊ギルド内でも反乱や仲間が死んだとき、そのカードで賞金をもらうこともあるらしい、賞金稼ぎの大半は盗賊ギルドに入っていてギルドを裏切る存在を消しているらしい。冒険者ギルドと同じくランクがありF～Sまでだそうだ。ランクCくらいから特殊カードで登録するらしいが、A以上の存在はまったく不明らしい。

すべての盗賊の登録が終わると、「でいぁ～」と水晶を叩き割った。

盗賊のリーダーは「シンさん、もし会いたければ町の水晶を持った占い師に話せば、いいお告げが出ると話し、早く村から離れる事をすすめ、それでは」と言い残しどこかに去っていった。

残った盗賊たちの半分は闇に消える様にいなくなり、残りの盗賊たちは、村を荒らし、酒や食料を見つけ宴会が始まった。村の家も焼き払われ、ろくな物がね～と言いながら火をつけて回った。

俺たちは遠く離れた丘でゆっくりその村を眺めながら眠った。

第１１話　ギルド登録（後書き）

よっぱらいて、妄想中です。
内容がくだらなすぎ大幅カットで反省中です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3632z/

クラゲと俺とドラゴン先生

2011年12月28日02時47分発行